

SUPER POWERED TRACER

LAYZNER

THE CONCLUSIVE STORY

蒼き流星の行方



高橋良輔・監修
竹田裕一郎・著

SPT LAYZNER
THE CONCLUSIVE STORY

蒼き流星の行方

SUPER POWERED TRACER

LAZYNEK

THE CONCLUSIVE STORY

蒼き流星の行方

高橋良輔・監修

竹田裕一郎・著

CONTENTS

あとがき	第4章 終焉	第3章 刻印	第2章 理想	第1章 凶弾
	58	45	31	17
				03

第1章

凶
弾



紅い流星が、迫る。
視界の片隅に現れた紅い流星は、巨大な紅い壁となつてエイジの視野のすべてを覆いつくした。

「——！」

エイジは声にならない叫びを上げる。

次の瞬間、彼は自分のいる場所に気づいた。粉々に碎け散つていくレイズナーのコクピットではなく、レジスタンスの秘密工場内に与えられた私室の、ベッドの上であることに。数分間の呆然を経て、エイジはゆっくりとベッドから起きあがつた。深い眠りの世界から強引に帰還させられた氣だるさよりも、大量の汗を吸つたシーツの不快さが上回つたのだ。

サイドテーブルの上のデジタル時計は、西暦一九九九年一二月三日午前三時二一分を表示している。

エイジは汗よりも不快感を流し去ろうと、冷水のシャワーを浴びた。冬の深夜、本来なら凍えてしまうであろうほどの痛切な冷気が、今のエイジにとっては自分と現実とをつなぐ確かな糸に思えるのだ。

(俺は……生きている……)

アルバトロ・ナル・エイジ・アスカ——それが彼のフルネームである。冗長にさえ思えるその長い名は、彼が二つの民族、二つの文化の間に産まれたことを表している。それも、国家などという小さな枠組みではない。恒星間の距離を越えた、二つの星の間だ。エイジの父親、ケン・アスカはアメリカ在住の日本人物理学者とドイツ人の妻との間に生を受けた。アメリカを母国として育つたケンはMITで強化宇宙服の研究に携わった後、人類初の月着陸を目指すプロジェクトに加わった。西暦一九六六年、アポロX号計画と名付けられたプロジェクトにより、ケンは宇宙飛行士として月へ降り立つた。だが、人類史上初めて月に到達した人物として、ケンの名は歴史に記されてはいない。

ケンの月着陸船は通信系統に異常をきたし、目的地に辿り着く前に、地球との連絡が完全に途絶してしまっていた。それでも彼は地上基地のバックアップもなしに、誰にも知られることなく月に降り立つた。しかし、そこでケンは、奇しくも地球の調査にやつてきていた異星人に遭遇、捕らわれてしまつたのである。

異星人の母星である惑星グラドスへ連行されたケンは、様々な調査を受けた後に準市民としての地位を与えられ、グラドス人アイラと結ばれる。やがて、二人の間にはジュリアとエイジが産まれたのだつた。

アルバトロ・ミル・ジュリア・アスカ——エイジのたつた一人の姉である。西暦一九九六年、グラドス軍艦隊が地球を制圧した際に、エイジとジュリアは数奇な運命を辿ることになった。相争う二つの母星の間で、弟は姉と戦うことになつたのだ。そして、それから三年……エイジは地球人のレジスタンスとともに、グラドスの占領軍に対する抵抗運動を続いている。エイジと和解したジュリアは二つの星の平和的共存を訴え、人々から「クスコの聖女」と慕われる存在となつていた。

だが、クスコの聖女がグラドス軍に囚われてしまう。ジュリアの居場所を求めて、エイジはグラドス地球駐軍司令官であるル・カインと対決した。

これまでエイジは、愛機であるレイズナーにのみ搭載された特殊機構▽—MAX▽で数々の窮地を乗り越えてきた。だが、ル・カインの駆るザカールには、改良強化された△レッドパワーV—MAX▽が装備されていた。

紅い流星と化したザカールが、レイズナーの機体を完膚なきまでに打ち砕く。まさに命脈を断たれんとしたその時、グラドス軍の増援トル・カインとの間に不可解な対立が発生した。

(……あの時、混乱に乗じて逃げ出していなければ、俺は確実にル・カインに倒されていた……)

そして、三日が過ぎた。

レジスタンスが総力を挙げて情報収集に努めているにも関わらず、クスコの聖女の行方は判明しない。三年間、ともに戦い続けてきたレイズナーは深刻な損傷を受け、修復の目処すら立っていない。戦う力を失ったエイジの心中には、焦慮のみが時間とともに積み重なっていく。

(俺は……生きている……だが……)

エイジは音声のみの通話モードで応答する。

「……すまない、起こしてしまったか?」

「デビッドの声音には、申し訳なさそうな感情が込められていた。

「いや、大丈夫だ」

「ちよつと……来てくれないか。第二格納庫だ」

「わかった、すぐに行く」

エイジの返答は、時刻に似合わぬしつかりとしたものであつた。だが、デビッドにはそのことに気づく余裕もないようだ。

手早く身支度を整えたエイジは、指定されたブロックへ向かう。
第二格納庫……そう聞いただけで、エイジにはトラブルの性質を推測することができた。第二格納庫には大破したレイズナーと、ロールアウトしたばかりの“あの機体”が格納されているのだ……。

通話からさほどどの間も置かずに、エイジは第二格納庫へ現れた。就寝中の呼び出しと思えぬほど、親友の身なりが整っていることに、デビッドは一目で気づいた。

(今夜も、眠れなかつたのか……)

心を痛めつつも、口にしたのは目の前の実務のことである。

「レイズナーが……俺たちのコンタクトを拒否してるんだ。これ以上近づくな、自爆する、とまで警告している」

エイジはうなずくと、レイズナーの前に立つた。機体頭部の光学センサーが全身を走査しているのがわかる。半瞬とたたず、レイズナーが語りかけてくる。いや、主体はレイズナーではない。その眞の支配者である制御コンピューター、フォロンだ。「アルバトロ・ナル・エイジ・アスカ、ワタシの信託を受けた者として、当方の疑念に応えてもらいたい。彼らは一体、何をしようとしているのだ?」

デビッドがエイジの耳に囁く。

「フォロンを移し替えるに当たっての、インターフェースの規格を調べようとしてたんだ。そうしたら……」
人間にとっては、かすかに鼓膜を震わせるだけのささやかな音も、フォロンの聴覚である音声センサーにとつては、充分すぎるので情報入力となる。

「ここ数日間、ワタシの機体に加えられた分析の種類から、機体の修理ではなく、ワタシの移植こそを彼らが望んでいるのだと、推測するに至つた。これは看過できない事態である。伝承者には、いかなる変更も加えられてはならない。それは伝承の信頼性を著しく損なうことになる。もしも、伝承の保護というワタシの存在目的が妨害されるのであれば、ワタシは自らを破壊するこ

とで、与えられた使命を全うさせねばならない……」

グラドス創世の秘密……それがフォロンの伝える「伝承」である。エイジは三年前、伝承を体現する者としてフォロンと自ら対決し、その信頼を勝ち得たのだった。

現在、ザカールによって破壊されたレイズナーの機体は、搭載されている二つのコンピューター、フォロンとレイの機能を維持することすら困難になりつつある。伝承を維持し続けるためには、フォロンとレイを新しい機体に移し替える必要があるのだ。「フォロン！」君に見えてもらいたいものがある！」

エイジのその言葉の意味を悟ったデビッドが、周囲に目線で訊ねる。その場に居合わせた者を代表して応えたのは、この工場の責任者であるドクター・ギルバートだ。

「かまわん、デビッドくん。フォロンに新しい機体を見てもらおうじゃないか」

ギルバートの指示により、第二格納庫のもつとも奥まった位置に設置されていたハンガーが、自走式架台の走行によって運ばれてくる。技術者たちが手早くその登頂部から被せられたシートを外していく。そこから現れたのは……蒼い装甲が美しく輝く、真新しい機体だった。

「これが——レイズナーMK-IIが……」

エイジだけでなく、デビッドやギルバートも感嘆の溜息をもらす。設計段階から関わってきたとはいって、内部フレームから一回り大きくなった敵SPTの分析をもとに、ドールと呼ばれる量産型の機体がまず完成した。グラドス軍の制式型に比べれば、汎用性やコンピュータシステムなどに多くの問題点も確かに存在する。しかし、この機体の最大の運用目的である、重力下における対SPT白兵戦闘に限れば、ドールは驚異的なほどの完成度を達成した。シミュレーションデータでは、ドール一個小隊とグラドス軍の地上戦用SPTドートール一個小隊の戦闘力は、完全に同等であると証明されたのだ。

そして、レジスタンスはSPTに統いて、MFの開発に着手した。SPTよりも汎用性が制限される代わりに、戦闘性能や特殊な機能を特化させた専用機——それがMFだ。可変機構の搭載によって空戦能力を向上させ、ドール部隊の指揮官機として設計された高性能機。その機体に、レイとフォロンを移植することを想定して、仕様変更したのが、このレイズナーMK-IIである。

コンピューターの移植が終われば、レイズナーMK-IIは完成する。それはエイジの新たな力となるだろう。だが、人間たちの論理と都合も、フォロンにとつては低位の判断材料にしか過ぎないようだ。

「三年前のこと思い出してほしい、フォロン！」

レイズナーの頭部を見上げ、エイジは語りかけた。思えば、あの時もそうだった。エイジにとって、フォロンはただのコンピューターではない。銃を向け、言葉をぶつけあつた。ともに戦った同志であり、手強い交渉相手だった。

「地球人とグラドス人の混血である僕の存在こそが、伝承が眞実であるとの何よりも確かな証しであると、君は認めてくれた！」

「そうだ……君の存在が伝承の正当性を証明する強力な傍証となることは、ワタシも認めていた」

エイジのアピールに対し、フォロンは抑揚の少ない声で応答した。声……コンピューターの発する音声出力を、果たして声と呼べるのだろうか？ だが、フォロンの搖るぎ無い論理は、使命に對して一途な人間の頑迷さに酷似していると、エイジは當日頃から思つていた。

自分の対話している相手がコンピュータであることも忘れ、エイジは必死に“説得”を続けた。

「このレイズナーMK-IIは、僕の分身なんだ。グラドス人が考案出したMFというコンセプトを、地球人が独自に検討して開発した……言つてみれば、二つの星のテクノロジーが融合して産まれた機体だ。このMK-IIに君と僕が乗ることこそ、二つの星が兄弟であることを人々に伝えていくことにはならないだろうか！」

「残念だが……エイジ、それは違う。両星の技術的交流には、伝承に語られているような過去の存在が干渉しているわけではない。君の語ることは、極めて人間的な幻想だと判断できる」

「フォロン——」

エイジが続く言葉を失つたのは、フォロンの主張の正しさを完全に認めざるを得なかつたからである。だが、その次の瞬間、フォロンは新たな倫理を、音声出力によつて紡ぎだしていた。

「だが、伝承に対する外部からの非干渉が保証されるならば、ワタシにとって自らの保護は……最優先されるべき使命である。エイジ、ワタシと再び誓約を交わして欲しい。新たな機体に移植されるまでの間、ワタシに対する情報の入出力を完全に遮断する——と。それが守られるのであれば、ワタシはMK-IIへの移植を受け入れるであろう……」

わずかな間、エイジは混乱し、そして理解する。フォロンは人間たちと“交渉”したのだ。自らの利益を守るために、交換要求……それはもしかしたら、フォロンに芽生えた“存在し続けることへの欲求”的な産物であつたのかも知れない。

「わかった、約束しよう。誰にも君の神聖な使命に干渉させはしないと……」

「了解した。エイジ、君の誓約を信用しよう」

エイジに語りかけるように、レイズナーの両眼が瞬く。無機質なS.P.Tの頭部が微笑を浮かべたように、エイジには思えた。

エイジがフォロンと新たな誓約を結んだ頃、グラドス軍の司令部は数日来の対外的な沈黙を守り続けていた。特に戒厳令が布告されることもなく、ただ状況の遅滞のみがそこにあった。その沈黙は地球人の市民だけでなく、グラドス人の兵士たちにも漠然とした不安の影を投げかけている。

この奇妙な沈黙の発端は、エイジヒル・カインが対決した、まさにその日に溯る。

囚われのジュリアが移送される——そのような欺瞞情報を流してエイジをおびき出したのは、自らエイジと決着をつけようとル・カインが考えたためである。そして、それが罠であると半ば承知の上で戦いを挑んでみせたのは、それがジュリアの行方の手がかりを知る数少ないチャンスだと、エイジ自身も知っていたからだ。

これまで、グラドス軍が幾度となく苦汁を飲まされてきたV-MAXを上回るレッドパワーを得たザカールは、赤子の手を捻るかのごとく、レイズナーを翻弄した。

三年前のグラドス軍の攻撃によって誕生した瓦礫の荒野に、今まで傷ついたレイズナーの各部が、新たな瓦礫となつて砕け散っていく。それは、これまでに幾度となく誇りを傷つけられ続けてきたル・カインの怒りを、まさに体現する猛攻であった。

だが、ル・カインは瀕死の体のレイズナーとエイジにとどめを刺そうとはしなかつた。決着をつける前に、彼には聞くべきことがあつたのだ。

「レイズナーにはどんな秘密がある。グラドスと地球の関係とはなんだ！？」

「何だつて……知らなかつたのか？」

グラドス創世の秘密を、ル・カインほどの実力者でさえも知らない。それは、エイジにとつて意外なことだった。だが、エイジの驚きを、ル・カインは自分が嘲笑されているかのように感じた。

「答える！」

自分でも意外なほどの怒気が、その声には含まれていた。ル・カインの見守る前で、半壊状態のレイズナーに乗ったエイジは応える。

「ああ、教えてやるとも。地球とグラドスは……！」

その言葉を遮つたのは、突然の乱入者たちによる砲撃であつた。為す術もなく、レイズナーの機体は吹き飛ばされる。グレス

コ提督の腹心であるカルラの部隊が、攻撃を仕掛けてきたのだ。

(これが……父上のやり方か！)

次の瞬間、ル・カインは思わず自分の機体をレイズナーの前に飛び出させていた。カルラ隊の二次攻撃が、ザカールのヘルップパワーヴィーマックスに弾かれる。

「ル・カイン閣下、おどきください！ これはグレスコ提督閣下のご命令なのです！」

カルラの声が通信機から飛び込んでくる。

(やはりそうか……。自分の息子にまで隠し通さねばならない秘密とは……ますます、知りたくなつたぞ！)

ザカールがカルラ隊の各機を威嚇するかのように、銃口を向ける。

「たとえ父上の命令であろうと、手出しは許さぬ。手出しをする者は……死ぬものと思え！」

その声に、その場にいたすべての者が凍り付く。ル・カインとて、グラードスでも随一の猛将グレスコの一子であり、自身も苛烈さをもつて知られた戦士である。実力も機体性能も、カルラたちにとつて敵し得るものではない。しかも、その声には、ル・カインの心底からの怒りが込められていた。いや、声ではない——叫び、むしろ咆吼と呼ぶべきだった。百獸の王の咆吼を浴びせられた小動物のごとく、カルラやその部下たちは動けなくなつた。

凍結したその時間を再び動かしたのは、新たな乱入者である。レジスタンスのなげなしの戦力であるS.P.T隊が、エイジを救うために乱入してきたのだ。

「エイジ、大丈夫か！」

デビッドのドールが煙幕弾を撃ち出す。他の機体はレーザードガンを乱射し、辺りは大混乱に陥つた。

(いまは……脱出するしかないか！)

ジュリアの居場所を知ることができなかつた。その無念さを嘯みしめつつも、エイジはレイズナーを煙幕の濃い方向へ跳躍させた。機体の各所が悲鳴をあげるように軋み、レイがアラームメッセージを途切れなく、伝えてくる。

「待て、エイジ！」

煙幕の中へ紛れ込もうとするレイズナーの後を、ル・カインは追おうとする。だが、その意に反して、ザカールの機体は動きを停止した。

「S.P.T加熱中、作動不可能……」

ザカールの管制コンピューターがアラームメッセージを告げる。V-MAXは機体の能力を著しく向上させる代わりに、一時的な活動停止状態を発生させる。まして、一種のブースターであるレッドパワーを使用した高機動戦闘を行つたザカールには、レイズナーを追撃する力は残されていなかつた。

「おのれ、エイジ！ 待たぬか！」

レイズナーを支援するように撤退していく、ドール部隊。カルラ隊がそれを追撃していく。混乱と喧嘩の中、ル・カインのザカールはただ一機取り残されていた。

4

グラードス軍統合本部ビル——通称グラドスターは、かつてニューヨークと呼ばれていた都市の中央部に建設されている。

活動停止状態から解放されたザカールで虚しく帰還したル・カインは、即座にグラドスターを訪れた。普段ならば、正式な面会の手順など踏まずに、いきなり父の執務室へ訪れるル・カインである。だが、この日に限ってはグレスコ本人の厳命であるとして、衛兵たちは執務室への通路に立ちはだかつた。

戦場でのカルラ隊の件とあわせて、ル・カインとしては、二重に脇が煮えくり返る思いである。だが、それでも彼は面会許可が下りるまでの一昼夜を、辛抱強く待つた。

グレスコの執務室への入室が許されたのは、翌日の午後である。グレスコの座の傍らには、カルラが控えていた。ル・カインの一瞥に対し、カルラは居心地悪げに、視線をそらす。この時、カルラ隊がレイズナーを取り逃がしたこと、ル・カインはすでに知っていた。だが、彼はあえて彼女の存在を無視したまま、グレスコに質問した。

「父上……この都市の治安責任者である私にも相談されずに、ジュリアを拘禁されたのは何故です！？」

ジュリアを捕らえたのは、まさしくグレスコの命を受けたカルラである。ル・カインはその事実を知つてゐるわけではないが、数日來の様々な事態の推移により、裏面の事情を洞察し、確信していた。

「…………ジュリアを連れてまいれ」

グレスコの命に、カルラは無言で低頭し、退出していく。そして、ほどなくジュリアを連れて戻ってきた。

「やはりでしたな……父上」

ル・カインの見たところ、数日間の拘禁にも関わらず、ジュリアには拷問の跡どころか、衰弱の様子さえ見あたらない。明らか

かに賓客としての待遇を受けていることが、見てとれた。

「父上、グラドス創世の秘密とは……私にまで隠さねばならない秘密とは、一体何なのですか！」

「ル・カインさま。グレスコ閣下がその秘密を貴方に隠されていたのは、貴方のことを気遣われてのことです」

「……眞実を知った時に、貴方が受ける衝撃を恐れてのことなのです」

ジュリアの言葉は、ル・カインにとって哀れみにしか思えなかつた。激情が全身を駆け巡り、ル・カインの視界が灼熱化する。矜持を傷つけられた怒りが、彼を蛮行に驅り立てようとする。だが――

「ル・カインよ。己れが誇りに釣り合うほどの器でないと証明したいのか……！」

腰のホルスターからル・カインが引き抜いた拳銃は、狙点を定めることなく、グレスコの腕にその銃口を塞がれていた。危険なほどに高まりかけた憤激を必死に抑制しつつ、ル・カインは拳銃を収めた。

（そういえば……私が支配者層の末席に迎え入れられ、創世の秘密を知らされたのは、今のル・カインと同年齢の時ではなかつたか……）

これまでグレスコは、おのが息子を眞実から遠ざけようとしていた。だが、それは父として、上官として、誤りであつたのかもしれない。すでにル・カインの職責は、グラドス創世の秘密を知るに充分な段階に達している。

グレスコは、現在がまさに“その時”であることを悟つた。

「ジュリアよ、話してみるが良い。事実を、ありのままに……」

——それは、長い物語であつた。

遙かな過去、惑星グラドスには現在のグラドス人とは生物的な起源を異にする、先住グラドス人が存在していた。彼らは文化と技術とを頂点まで高めながらも、生物としての限界を迎えていた。

出生率の著しい低下。それに反比例するかのような、遺伝的欠陥を有する個体の増加。先住グラドス人は、自らが種としての滅びの時を迎えることを悟らざるを得なかつた。

滅びは良い、それがさだめなら……。だが、彼らは自分たちが築きあげた文化と技術が失われていくことには、耐えられなかつた。

先住グラドス人は、全銀河に後継者を求めた。そして、地球人と出会つたのである。まだ原始段階にあつた地球人の生命核を採取した先住グラドス人は、惑星グラドスで彼らを繁殖させ、自らの文化と技術を継ぐものとしたのだ。

つまり、グラドス人と地球人は、祖を同じくする兄弟である。

これはグラドスの神聖マザーコンピューターが伝承し、代々の支配者層にのみ伝えられてきた、最高機密であつた。

(私も……初めて真実を知られた時は、その衝撃に苦しんだものだ)

若き日、グレスコ自身が感じた衝撃。宇宙に広大な版図を築き、偉大な文化を敷衍してきたグラドス人。だが、その文化は彼ら自らが生み出したものではなかつた。与えられたものを我が物として誇ってきた身の、なんと滑稽なことか。

その地球に対する侵攻計画を決定したのは、神聖マザーコンピューターだ。先住グラドス人が遺したそれは、現在でもグラドス人に行動の指針を示し続けている。神聖マザーコンピューターが地球文化の根絶を指令した時、地球侵攻艦隊の司令長官に任じられたグレスコにとって、それに従わない選択は存在しなかつた。

事実、地球占領後は文化矯正隊を編成。地球の文化のすべてを炎の中に焼き捨てようとしていた。だが、その一方でグレスコ個人は、地球文化の魅力に取り憑かれてもいた。私室には香を焚き、絵画を飾り、書物を読む。腹心たちには、滅ぼすべき対象の研究——と説明してあつたが、それに疑いを持つ者も少なくはなかつただろう。自分たちと同じ血肉を持つ種族が、ゼロから生み出していった文化。そこには、グレスコという一個人を引きつけてやまぬ何かが、たしかに存在していたのだ。

だが、そのような境地に至るまで、真実を知つてから少くない時を必要としたのも事実だ。いま、グレスコの眼前には、二十数年前の自分がいた。

5

ジュリアが語つた“事実”は、ル・カインにとつては、到底受け入れられる類のものではなかつた。

「何を世迷い言をぬかすか！ 誇り高きグラドス人が、下等な猿である地球人と同一民族であるなどと……馬鹿馬鹿しい。聞くに耐えぬわ！」

「ル・カインよ……ジュリアの語つたことは、すべて事実だ。嘘偽りはない」

「父上……！」

「グラドスの権力中枢にあらんとする者は、いざれ知ることになる秘密だ」

ル・カインの拳が一瞬のうちに漂白される光景を、グレスコは見た。あまりに強く握りしめられた拳から、血の気が引いてい

つたのだ。あえてル・カインの胸中を思いやる自分の感情をねじ伏せ、グレスコは言を続けた。

「……ル・カインよ。グラドス人が地球人を支配することが、何故許されていると、お前は考へていいのだ？」

「それは……高度な知性を有する我らグラドス人こそ、全宇宙の支配者として、ふさわしいからです！」

ル・カインの解答は、グレスコの予想通りのものだった。グラドス人の一般民衆に同じ質問を投げかけてみれば、おそらく大部分が同様に答えるであろう。にも関わらず、グレスコは失望を禁じ得ない。ゆっくりと頭をふると、グレスコは語氣鋭く言い放った。

「……お前は支配の原理を学ばねばならない。支配とは、自らを悪と認めるところから出発するのだ。支配力を維持するために、百万の人間の血が流されたことを、お前は知らねばならない」

「だからこそ、流された血を無駄にしないためにも、支配する者は優れていなければならないのです！」

「優れているとはどういうことだ？ 知識か、肉体か、家柄か、容貌か……危ういものだ。そのような価値観は移ろいやすい」

「グレスコはゆっくりと立ち上がった。そして、息子の前に歩み寄る。猛将と呼ばれた提督も、地球占領後はすっかり老成してしまった。そう囁かれ続けた噂を、ル・カインも耳にしていた。だが、こうして眼前に立つ父の姿に、その権力を誇示する道具の一片でもあつた頑強な肉体には、いささかの衰えもないことが一目でわかる。

「肉体と精神圧、一枚の壁が眼前に立ちはだかっているような威圧感に、ル・カインは軽い目眩さえ覚える。

「支配の本質は力だ！ 他者を押さえつける力……すなわち、悪なのだ。自らをまず悪と認める事のできる者、すべてを知つた上でなお、超然と君臨できる者こそが必要なのだ」

「そ、それは父上のお考え。私の場合は、あくまでも優れた者こそが支配すべきという考え方です」

「支配だけなら、愚者でも可能だ！」

その言葉は、地球占領軍の総督という立場にありながら、地球文化に耽溺するグレスコの自己正当化と、ル・カインには思えた。

「父上……父上は、支配の高みからお逃げになろうとしている！」

グレスコには、ル・カインの考えが手に取るように理解できた。何故なら、それは彼自身が初めてグラドス創世の秘密を知つた若き日に抱いた感慨と、まったくの同種のものであつたからだ。

（やはり、ル・カインにも私と同じく、時こそがまだ必要であったということか……）

親子の論理の応酬を、ジュリアとカルラは無言で見守っていた。だが、二人の心理は大きく異なつている。ジュリアが自分の介入の必要性を感じていないのに対し、カルラはル・カインと同様に、知らされた眞実の重みに耐えかねていたのだ。

「ル・カイン……私はお前を買ひがぶりすぎていたようだ。お前は未熟すぎる」

卑怯ですぞ、父上。私が父上の思うとおりにならないからといって！それが父上の支配の論理ですか！」

「これ以上の議論は無意味だ。ル・カイン、私はお前を罷免する」

（馬鹿な……こんなことが現実に起るはずがない。こんな、こんな……！）

その言葉が聴覚から知覚に至った時、ル・カインは視野が狭窄していく感覚にとらわれていた。さに抵抗しながら——引き金を引いていた。

「う……」

「……」

「ち、父上！」

「……」

「……」

「ル・カインよ……」

「……」

「……」

「わかるか……お前は今、この私を支配したのだ。これこそが力であり……お前は悪なのだ。自覚するが良い。その上で超克してみせよ。その時、初めてお前は……私の後継者となる……」

その言葉が途切れるとともに、二発目の銃声が執務室中に響いた。額の中央を打ち抜かれたカルラが、断末魔の声もなく、崩れ落ちていく。

その姿から、ジュリアは目を背けた。三年前、ともに同じ男性を愛した嫉妬から、カルラは言葉でジュリアを傷つけようとした。もつとも、ジュリアはアーマス・ゲイルとの絆を信じており、カルラの虚言で何かが揺らぐことはなかった。ジュリアにとつて、友となり得るような女性では決してなかつたが、それでもこんな死に方を強制されるような、邪惡な人間だったとは思えない。そんな葛藤にもかまわず、グレスコはジュリアにも銃口を向けた。だが、もはや彼にはさらに引き金を引く余力は残されていなかつた。赤黒い血の塊を吐き出し、グレスコは「れの作つた血だまりの中へ倒れ込んでいく。

「ジュリアも……殺せ……」

呆然と立ち尽くすル・カインの耳に、なおもグレスコの言葉が響く。

「私の死の真相は、秘密に……するのだ。グラドスの支配とお前の……お前自身のために……」

第2章

理
想



曇天の空に、弔砲が轟く。

数日間の沈黙の後、グラドス軍はグレスコ総督の突然の死去を発表した。公式発表では下級将校のクーデターに際し、自ら抗した上で殉職と伝えられている。

十二月六日、グラドスター前の特設会場で行われた公葬には、地球全土から集まつたグラドス軍高官が臨席していた。式の進行にともない、丁重を極めているとはいえ、所詮は形式的なものでしかない弔辞が繩々と読み上げられていく。

一通りの進行が消化された後、ル・カインが壇上に登つた。グレスコを射殺した実行犯をその手で誅した彼は、占領軍内部での席次に従つて、グラドス本星から新たな総督が到着するまでの間、総督代理を勤めることになる。彼の言動には、列席者たちの耳目が集中した。

実の肉親による、他者よりは深い哀悼が込められた弔辞。少なくとも、聴衆にそう思い込ませるだけの演技は、可能だった。そして、弔辞を終えたル・カインは、唐突にある人物を呼び出した。

「ロアン・デミトリッヒ、前へ！」

「はっ！」

三年前、エイジとともにに戦った青年が、現在はグラドス軍の事務官となつてゐる。もっとも、聴衆の中にそのことを知る者は多くない。ほとんどの者にとって、ロアンはただの事務官の一人でしかなく、参列者たちのざめきは「何故ここで地球人を?」――という性質のものだつた。だが、疑惑と好奇の視線が集まる中、ロアンは当然の権利を主張するかのように昂然と、壇上に登つていく。

当番兵に運ばせた、グラドス軍将校のみに与えられるマントを、ル・カインは自らロアンの肩にかけた。

「諸君、紹介しよう。今日から私の副官となる、ロアン・デミトリッヒだ！」

その言葉の意味が浸透することもなく、聴衆たちの間にさざ波のようなどよめきが広がつていった。

「彼は地球人でありながら、実に優秀な男だ。これから私は、優れた者ならばたとえ地球人であろうとも、分け隔てなく登用することにした。それでこそ初めて、理想的な国家が建設できると気づいたからだ！」

さざ波は大波となり、広場全体を揺るがす怒濤となつた。だが、それは単色に染められているわけではない。グラドス人は問答無用でこの発表に承伏しかねている大多数と、逆に我が意を得たりと満足する、ごく少数に分かたれた。そして地球人は、自

分の能力を占領下でも活かせるであろうことに驚喜する者と、「たとえ地球人であろうとも」という用語に敏感に反応し、ル・カインがいまだその心の奥底では地球人をどう思っているかに気づいて不快感にとらわれた者と、所詮は征服者の傲慢な慈悲に過ぎない……と諦観する者とが、渾然一体となっている。

二十四時間経たぬうちにこのニュースは地球全土に伝えられ、地球人とこの星に駐留するグラドス人のすべてが、この公葬の列席者たちが抱いた感慨を、共有することになった……。

ル・カインが唐突とも言えるほどの変節を遂げた裏には、事情がある。

心ならずもグレスコを射殺してしまったその日、グレスコとカルラの遺体に祈りを捧げるジュリアを、ル・カインは手にかけることができなかつた。そこへ現れたのが、グレスコへの報告書を届けに来たロアンであつた。

一目で事態を正確に理解したロアンは、カルラがクーデターを起こしてグレスコを殺害、その場でル・カインに廻刑されたというシナリオを即座に組み上げた。そして、現場に残る痕跡をすべてシナリオに基づいて加工してみせたのである。しかも、その過程において、自分は提案しただけであり、決断はル・カインが下した……というスタンスも揺るがせなかつた。これによつて、ル・カインはその立場にも自尊心にも、毛ほどの傷も受けることはなかつたのである。

グレスコの立場にともなう権限を一時的に引き継いだル・カインは、それまで彼の立場では閲覧できなかつたトップシークレットを閲覧することに熱中した。そして、ジュリアが語つた「グラドス創世の秘密」が事実であることを、ついに認めざるを得なくなつたのである。

(それでも、支配は優れていればこそ、だ……！)

ル・カインは占領軍の士官・兵士たちの中から、自分の片腕となる人材を捜し求めた。だが、皮肉にもグレスコという強大な指導者に率いられていたが故に、グラドス軍の内部には、彼の品評に値する能力や個性を有する者はいなかつたのである。

公葬の前夜、ル・カインはロアンを私室に呼び寄せた。

「試みに問うが……お前が忠誠を誓う対象はグラドスか、それとも地球か？」

ロアンはこの質問が、自分のこれから運命を決定的なものとする性質のものであることを悟つていた。巧みに表情を殺しながら、答える。

「私は……星には忠誠を誓いません。私が仰ぐのは、忠誠を捧げるに足る一個人……優れた導きをなさる方です」

ル・カインは微笑を浮かべる。幾人ものグラドス人に質問して、ついに聞くことができなかつた満足すべき返答を、ようやく

得ることができたのだ。

「よからう。ならば、私とともに来るがよい、ロアン・デミトリッヒ。支配の高みへ、私はお前を伴おう……！」

「はつ、お心のままに」

こうして、ロアンはル・カインの忠実な副官となつたのである。

2

ル・カインとロアンの進めた政策は苛烈であつたが、公平なものでもあつた。

まず、グラドス人、地球人を問わず、若手将校や下層市民の中でも能力があり、二人の理想に共鳴する者たちが次々と登用されていった。そして、彼らに反抗する者たちは、ことごとく打ち倒されていったのである。そこには、グラドス人と地球人の分け隔ては、存在しなかつた。

グレスコ時代は理性的な抑制がかけられていた地球文化根絶計画を、ル・カインは徹底的に遂行した。その一方で、グラドス本星からの干渉を断ち切るために、衛星軌道上に定位していた中継ステーション衛星を破壊している。

必然的に、グラドス人と地球人の双方から、彼らに対する強い反発が生まれていった。だが、ル・カインとロアンは力をもつて反対者を撲滅し、理想国家建設への道をつき進んでいった。

——決裁書の輪郭がぼやけて、かすむ。いや、ル・カイン自身が目眩を起こしたのだ。さすがに深い疲労を自覚して、彼は政務を中断した。総督代理を宣言して以来、激務に忙殺される日々が続いている。それにしてもこのところ、仮眠をとることに悪夢にうなされることが多くなつた。

(呪いとやらも……あながち妄言ではないかも知れぬな)

お前は呪われている——ル・カインにそう言い放つたのは、数日前に処刑された古参の将軍である。彼は、ル・カインの「専横」を見かねて、グラドス本星に痛切な讒言を行つたのだ。ロアンが即座にその将軍を逮捕し、彼は即日銃殺されることになつた。だが、死の直前、将軍は言い放つたのだ。

「この親殺しめ！ 誰にも知られないと思うなよ！ 貴様の蛮行がいつまでも許されるはずがない。グレスコ閣下も、貴様を呪つているぞ！」

例え厳重に箱口令を敷いたところで、噂のすべてを根絶することは不可能である。覚悟——というよりも、予測されていた事

態である。

しかし、結果としてはその將軍の報告によって、事故として処理していた中継ステーション衛星破壊の真相も明るみにされ、グラードス本星はル・カインの更迭を決定した。

現在、新任の総督が率いる艦隊が、太陽系に接近しつつあるという。

「艦隊をともなつての着任——すでに本国も、私を反逆者と認定したということか」

ル・カインはこの日も、つい先刻までロアンらとともに、艦隊迎撃に関する戦術討議を続けていた。もちろん、決戦時においては危険な不確定要素となるであろう、エイジたちレジスタンスとの決着を早急につけることも既定の事実として論じられた。思えば、奇妙な事態の急変である。数週間前までは、ル・カインがエイジを反逆者として付け狙っていた。だが、今では彼自身が歴としたグラードスに対する反逆者なのである。

(それもかまわん。この地に理想の国家が建設できるならば……)

ル・カインの脚は、その持ち主も自覚せぬうちに、ある一室へと向かっていた。グレスコの遺体が冷凍ケースに収められ、安置されている部屋である。

だが、その部屋には、先客がいた。

(……ジュリア)

父子の惨劇を目撃したジュリアは、そこで見聞きしたことを、誰にも語ろうとはしなかった。そのこともあって、奇妙な後ろめたさを覚えるル・カインは、グラードスター内部に限り、彼女にある程度の自由行動を許してしまっていたのである。

ケースの傍らにやつてきたル・カインは、冷ややかな眼で、父の遺体を見下ろした。ジュリアも祈りを中断し、黙礼する。

「優れた者によるより良き支配と、それに従う無垢なる従順——それこそが、私の理想だった……」

ジュリアと父、いずれに話しかけているのかもわからずに、ル・カインの言葉は紡ぎ出されていく。

「理想の国家は、ついに実現しないままに潰えていくのだろうか……」

「——何故、こうなってしまったのだろう。ロアンたちと戦略を検討している時には、高揚感によつて消し去られていたはずの不安が、ル・カインの胸中を支配しはじめる。

「父上、貴方が悪い！ 幼き日より、グラードス人としての誇りを持ち続けるよう、言い続けてきたのは……貴方では……ありませんか……」

ル・カインはいまだ知らない。かつて、父もまた彼と同じ悩みを抱いていたことを……。幼いル・カインに誇りのみを教え

込んだグレスコが、支配者としての原罪を直視できるようになるまで、二十年余りを必要としたことを……。

「ジュリアよ……祈ってくれ……」

気がつくと、ル・カインはジュリアの前に跪いていた。心の底から絞り出すような、弱々しい声音が、ジュリアの耳を震わせる。

「我が父のために……祈るのだ」

骨太な手が、華奢な細腕に救いを求めてしがみつく。

「お前が本当に聖女であるのなら、父の……そして、己れの父を手にかけた哀れな男のために……祈ってくれ……」

そして、ジュリアの手が、やさしくル・カインの背をなでる。その感触は、忘れて久しい安らぎを感じさせた。

——翌朝、心穏やかな眠りから目覚めたル・カインは、傍らにいてくれたはずの聖女の姿を、どこにも見出すことはできなかつた。

3

ル・カインの副官となつて以来、ロアンは常に危機にさらされていた。その立場を妬むグラドス人が謀殺を目論み、裏切りを憎む地球人が暗殺を狙つてゐるからだ。

だから、その日も柱の影で彼を待ち受けている人物の存在に気づいたとき、ロアンは先に拳銃を抜き、即座に相手を制圧したのである。だが、今回ばかりはロアンの緊張も、杞憂ですんだようだ。

「や、やあ、ロアン……」

緊張感の欠如した笑顔を浮かべているのは、ロアンにとつては旧知の人物である。

「アーサー、君か……」

アーサー・カミングス・Jr.、グラドスに忠誠を誓い、B級市民としての地位と待遇を与えられた人物である。ロアンとは三年前、火星から地球への旅とともにした仲だつた。

「少しは僕の立場を考えてほしいものだね。君はすでに僕に射殺されてしまつていても、不思議ではなかつたんだよ」

「ごめんよ……。でも、どうしても君と二人だけで話がしたくつてさ」

アーサーは、ロアンを人気のない倉庫へ連れ込んだ。

「今日こそは、君の本心を聞かせてもららうよ！」

「本心?」

「そうさ、君は本当は地球側のスパイなんだろう。つらいだらうなあ、みんなを裏切るふりをして……。僕にだけは、その苦しい胸のうちを話してくれよ。」

「……話というのは、そんなことかい?」

「うん、そうだよ!」

その無邪気としか形容のしようのないアーサーの表情に、ロアンは内心で舌打ちをする。

(統帥部が兵士や地球人の不満分子を牽制するため、あちこちに監聽器を仕掛けていることすら、この男は知らないのか……!)

アーサーの実家はイギリスの名家であり、グラドス軍に多額の献金を行っている。B級市民権もそうして手に入れたものだ。最近ではレジスタンスのエイジやデビッドにグラドス軍の内部情報をリークして、スパイを気取っているようだが、それがバレずにすんでいるのは、ロアンがもみ消し工作を行っているからに他ならない。

「何を言つてゐるのかわからないが、あまり胡乱な発言は良くないよ、君」

「またまた! 君つて本当に用心深いんだなあ」

「アーサー、君は本当の馬鹿だね」

「な……!」

「忠告しておくよ、命や立場が惜しかつたら、グラドスに忠誠を尽くすことだ。あまり、おかしなことは考えない方がいい」

「ロアン……じゃあ、君は本当にグラドスの……。いや、君はル・カインに脅迫されているんだ。そ、うだろう? ル・カインの名を耳にした時、初めてロアンの表情に変化が起きた。

(脅迫だと……閣下はそのような卑劣なことをする方ではない!)

副官に任命されて以来、ロアンは公務時間の大半を、ル・カインとともに過ごしてきた。そして、ル・カインの単純ながらも気高い理想論を、誰よりも理解するようになっていたのだ。

「ル・カイン閣下は、僕を正当に評価してくれている。僕は、その期待に応えなければならぬんだ」

「ロアン……!」

これ以上の会話は、ロアンにとつて苦痛でしかなかつた。

「昔のよしみで、今の話は聞かなかつたことにしておくよ」

「裏切り者!」

倉庫から出でていこうとするロアンの背に、アーサーは叫ぶ。だが、ロアンの心はそんな罵倒に動かされたりはしない。それは、すでに聞き慣れた馴染み深い言葉であつたからだ。

ロアンが退出すると、自動ドアがその後ろ姿を覆い隠した。思わず、倉庫の隅に座り込んでしまったアーサーは、それでもドアに向かつてつぶやき続けていた。

「信じてるぞ、ロアン……僕だけは、信じてるからな……」

ジュリアがル・カインのもとを去ったのは、その日の早朝である。

あまりにも当然のごとくグラードスターを辞去するその高い後ろ姿に衛兵や当番兵は咎め立てをすることができなかつた。△クスコの聖女▽を慕う人々の導きで、ジュリアはそのまま、レジスタンスの秘密工場を訪れた。

「……姉さん！」

人々の噂は、すでにエイジたちにジュリアの来訪を知らせていた。工場の入口で待ち受けていたエイジが真っ先にその手をとつて喜ぶ。デビッド、アンナ、シモーヌ、エリザベス、仲間たちも口々にジュリアの無事を祝い、そして歓迎する言葉を投げかける。

やがて、秘密工場の食堂に落ち着いたエイジたちは、ジュリアの□からグレスコの死の真相を知らされた。

「そんなことが……」

「ル・カインは純粹すぎる人なのです。もはや、走り続けるあの人を止めることのできる者はいないでしょう」

「ジュリアさん、俺たちはエイジと一緒に貴女を救出するための準備を進めてたんです。丁度いい、このまま総攻撃をかけちまおう！」

デビッドの言葉に、エイジたちもうなづく。だが、ジュリアは悲しそうに頭を振った。

「ル・カインを倒すことができたとしても、貴方がたの力の多くもまた失われてしまうでしよう。現在、グラードスの本星から新しい大艦隊が接近しつつあります。その力に対抗することは、到底かないません……」
盛り上がりかけた勢いは、瞬時にして霧散した。だが、冷水を浴びせられたような表情で沈黙する一同の前で、ジュリアは静かに告げる。

「エイジ、クスコへ行きましょう。私たちは、先人たちの偉大な知恵にすがるしかないのです……」

ス軍は互いに布陣していた。グラドス軍の戦略目標、そして解放戦線の防衛拠点、それこそが△グラドスの刻印▽である。かつて、地球から生命核を採取した先住グラドス人は、兄弟となつた二つの種族が成熟しないままに接触を果たしてしまつた際の危険を回避するため、安全装置を遺していったという。それが、グラドスの刻印である。

この混迷する状況下で地球人が生き残るには、この刻印に頼るしかない。それが、ジュリアの出した結論であつたのだ。

決戦の前夜、ジュリアはエイジだけに語つた。

「本当は、私は刻印を使いたくはありませんでした。何故なら、刻印の発動は両種族の協調の可能性の芽さえも、摘んでしまうからです……」

「わかるよ、姉さん。俺も幾度となく、考えたんだ。グラドス人と地球人が共存する方法はないのかつて……。でも、駄目なんだ。グラドス人は誰もがみんな、自分たちを宇宙でもつとも進化した崇高な存在だと思っている。この宇宙に自分たちと同等の存在がいることを彼らに理解させるのは、不可能なことなのかも知れない……」

「エイジ、忘れないでください。刻印を使えば、地球はきっと地球人の手に戻ることでしょう。でも……」

「わかってる。俺たちの理想にとつては、それは△敗北なんだ……」

弟の成長を確信したジュリアは、聖女としての慈愛でなく、姉としての家族愛に満ちた表情で、エイジに微笑みかけた。

「刻印が発動するまで…守っていてください……」

そう言い残して、ジュリアは刻印の中へ姿を消していった。

午前一時四一分、グラドス軍と解放戦線のS.P.T隊は、正面から激突した。デビッドやシモーヌもドールに搭乗し、小隊長として戦力の一部を率いている。彼らは奮戦した。だが、一機あたりの戦力が拮抗していても、総体としての数の戦力差は補いがたい。

エイジはレイズナーマーK-IIを、敵軍の右翼側面に突入させた。

「レイ、△V-MAXIMUM▽発動！」

「レディ！」

レイズナーマーK-IIは重力下での運動性を向上させるために、飛行形態に変形する。グラドス軍におけるMFソロムコのコンセプトを参考したものだ。その上で△レッドパワー▽に対抗するために装備された△V-MAXIMUM▽を使用すれば、空中戦においてMK-IIに敵し得る機体は、両軍を通じて存在しない。

エイジは右翼上空の制空権を完全に掌握し、地上の友軍を援護する。だが、それでも解放戦線は、次第に後退を余儀なくされ

ていった。

手が操縦桿を握る形に固まってしまって、動かない。終日、MK-IIとともに戦い続けたエイジは、両手を湯にひたそと、テントから抜け出した。

この季節、南半球では寒さの心配をする必要はないのだが、それでも夜となれば、昼よりは格段に冷たい空気が肌に突き刺さる。白い息を吐き出しながら立ち上がるエイジの眼前に、温かそうな湯気をたてるコーヒー・カップが差し出された。

「お疲れさま、エイジ」

「アンナ……」

エイジとアンナは、岩肌の上に並んで腰掛けた。コーヒーカップのぬくもりが、強張った両手をゆっくりと、優しくほぐしていく。星空を見上げながら、エイジはつぶやいた。

「なんだか、宇宙に戻ってきたみたいだ……」

クエスコの空では、星の輝きがニューヨークとは比べものにならないほど、鮮やかに見える。人口密集地では、三年前にグラードス軍が激しい攻撃をしかけた際の塵芥がいまだに漂い続いているため、よほど明るい星以外は、ほとんど肉眼で見ることはできないのだ。

エイジとアンナが出会ったのは、赤い空の下だ。火星で生命の危機に瀕していたアンナを救つたのがエイジであり、誰の理解も得られないでいたエイジを最初に信じたのが、アンナであった。そして、二人は仲間たちとともに、宇宙空間で幾多の危機を乗り越えた。辛く苦しい旅であつたはずなのに、その時の記憶は一人にとって、何よりも大切な思い出となっている。満天の星は、二人の意識を、過去へと飛翔させた。

「三年前にアーサーが言ったこと、覚えてる？」

アンナの突然の質問に、エイジは答えられなかつた。

「七人の仲間で、必ずもう一度会おうつて——アーサーは言つたの。でも、まだその約束つて、守られてないのね……」「ああ……」

アンナが言う通りだつた。現在のロアンとアーサーはニューヨークのグラードスタワーにいて、七人で集まれた機会は一度もない。

そして、いまのエイジたちは明日を生き延びる保証すらない日々を送つてゐる。

「……エイジ、死なないでね」

アンナの真摯な瞳を見ながら、エイジは考えた。

(デビッドなら、こんな時、なんて言つてやるんだろう……)

シモーヌならば、デビッドが恋愛や話術に長けていたのは到底、評してくれないだろう。だが、それでも彼は常にエイジよりは多弁に、自分の胸のうちを明かしていた。エイジには、それができるデビッドが羨ましいのだ。
言うべき言葉が見つからない——それ故の選択であつたのだが、結果として彼は正しかつた。エイジは無言で、アンナの身体を抱きしめたのである。アンナのうちにある冷たい不安の塊は、エイジの体温によつてゆっくりと解かされていった……。

翌三一日午前七時、なげなしの戦力を刻印の周囲に集結させた解放戦線に対し、グラードス軍は完璧なまでの包囲網を完成させた。

ニューヨークのグラードスター司令室からその配備を完成させたル・カインは、メインモニターに表示される両軍の配置図に満足気に見入っている。

「ふふ……この戦、先が見えた」

「言うと、ル・カインは指揮座から立ち上がつた。驚く幕僚たちの前で、彼はロアンの肩を叩いてみせる。
「ロアン・デミトリッヒ、後はまかせた。私は果報を寝て待つだけだ」

「閣下……」

ロアンは続く言葉を失つた。あまりにも意表をつく指令であつたからだ。もともと、ル・カインは欲しいものは、自分の手でつかみ取る性格である。そんな彼に、あまりにも似つかわしくない言葉だつた。

だが、ル・カインの表情を見ているうち、ロアンはその心中を正確に理解していた。ル・カインは自分に“箔をつけよう”としているのだ。地球解放戦線を殲滅する——その最終局面の指揮をとらせることで、ロアンを自軍のナンバー2として全軍に認知させようと、ル・カインは考えているのだ。

「選ばれた者にとまどいは不要だ。ただ、私の期待に応えてくれればよい」

「そう言い残すと、ル・カインは司令室から退出していった。

——クスコの地に、刻印がいま目覚めようとしていた。

数万年の過去に先住グラドス人が残した聖遺物は、ジュリアの手で永い眠りから覺醒させられた。全長五〇〇メートルにも達しようかという巨大な円筒形の刻印が、両軍の目の前で、クスコの遺跡の地下よりその巨大な全貌を現したのである。

その光景は、もちろんロアンの指揮下に委譲されたグラドス軍司令室にも伝えられた。正体不明の物体の出現に、現地の両軍がとまどう様子が、ロアンたちにも手にとるようにわかる。

「いつたい、何なんだ、あれは……？」

オペレーターの一人がもらした、この平凡な言葉こそが、この司令室にいる全員の胸中をもつとも正確に代弁していた。

「全軍に撤退命令を出したまえ！」

司令室に勤務するオペレーターたちは、みな忠実にその指令を全軍に伝達し始める。だが、グラドス人の参謀たちは、その指令の意味するところを正確に理解していた。

「この地球人め、裏切ったな！」

最初に拳銃をかまえようとした参謀の腕を撃ちぬいたのは、地球人才オペレーターの一人である。ロアンの推挙によつて、その能力をル・カインに認められた若者だ。そして、その銃声を契機とするかのように、司令室に勤務する地球人の全員が、グラドス人に銃を突きつけたのである。

「貴様、最初からそのつもりで……！」

ロアンは冷徹に宣言する。

「グラドス人の諸君、このタワーはこれより地球解放戦線機構の管理下に移行したことを、心得てもらいたい！」

グラドスワーラーの内部で、地球人たちは効率的にグラドス人を制圧していく。人員も武器もすべてが周到に計算され、この時のためには的確に配置されていたのである。さらに周辺からも解放戦線の戦力が殺到し、抵抗するグラドス兵を排除していく。解放戦線との通信を確保したロアンは、グラドス軍の無力化を次々と成し遂げていく。その表情には、いかなる人間的な感情も表れてはいなかつた。

グラドスワーラーの頭頂部は、かつてのグレスコの私室と執務室のみで構成されている。もちろん、現在の主はル・カインだ。ロアンの指示により、解放戦線はこのブロックのみには手出しをしていない。孤立したル・カインには、もはや何の力も残されていないことを計算しての措置である。

同日の夕刻、一通りの実務的処理を終え、悪魔的なまでの辣腕でグラドス軍を解体し終えたロアンは、その執務室でル・カイン

ンと対面していた。

「父を殺してまで守らんとした私の理想が、まさかこのような形で崩されようとはな……」
ル・カインの貌には、自嘲の笑みが浮かんでいる。自分があえて分の悪い賭けにすべてを投じ、そして敗北したことを、理解していたのだ。

「閣下、おわかりください。私は地球人なのです」

ロアンのその言葉には、一片の躊躇もない。おそらくは幾度となく、心中で繰り返し続けてきたのだろう。
この時、ロアンはすべての武装を外して、ル・カインの前に立っている。それに対し、ル・カインは敗軍の将でありながら、拳銃を腰に下げたままだ。ル・カインはゆっくりと立ち上がり、ロアンの前に歩き出す——そして、すれ違った。

「閣下……」

死をも当然のことと考えていたロアンは、ル・カインの真意を測りかねつつ、振り向いた。そこで見たのは、ル・カインの歩み寄った窓に向かって、紅い流星が飛来してくる光景である。

主の直前で停止した流星が紅い光を消し去る——それは黄金の装甲に包まれたザカールだった。

ル・カインはロアンの眼を見据え、いまだ誇りを失わぬ声音で宣言した。

「ロアン・デミトリッヒ、このような結末になつたとはいえ、貴様たちに夢を託していたのもまた事実。その生命、私が歸つてくるまで預けておこう」

「ロアン・デミトリッヒ！ 私は帰つてくるぞ、必ず！」

再び紅い流星と化したザカールは、星空の中へ消えていった。その光を見送りながら、ロアンは慣れ親しみ始めていたグラード式ではなく、地球式の敬礼を贈るのだった……。

第3章

刻印



デビッドの右ストレートが、ロアンの頬にクリーンヒットした。

たまらずに吹っ飛んだロアンに、デビッドが手を貸して起きあがらせる。

「これで貸し借りはなしだぜ！」

「ひどいなあ、どう考えても、倍返しにされたような気がしますよ」

ニヤニヤしながら助け起こすデビッドに、ロアンは左手で頬をさすりながら、応えた。かつて、デビッドがグラドス軍に捕虜として囚われたことがあった。その時、グラドスへの忠誠を証明するために、ロアンがデビッドを痛めつけたことがあったのだ。「まったく、子供じゃないんだから、こんな方法でしか決着つけられないのかしら！」

シモーヌが怒る。エイジとアンナ、エリザベスがたまらずに笑い出す。

「これで……やつと、七人の仲間が全員そろったのね！」

アンナは懐かしい仲間たちの顔ぶれを見渡した。エイジ、デビッド、ロアン、シモーヌ、エリザベス……。

「あら、誰か足りない……？」

一同が互いの顔を見渡した時、トライポッドキャリアのコクピットから、外部スピーカーでアーサーの声が響き渡った。

「おおい、発進準備できたよお！」

地球解放戦線がクスコに設営した臨時の宇宙港から轟音とともに、トライポッドキャリアが離昇する。トライポッドキャリアとは、グラドス軍に制式採用されている、S P T三機を収容可能な小型母艦である。単独での大気圏突入と離脱が可能なため、地球でのシャトルと同じように運用されている。エイジたちはかつて、このトライポッドキャリアの同型機で、火星から地球へ渡ってきたのである。

今回は、逆に地球から旅立つのだ。宇宙へ進出したグラドスの刻印の後を追つて……。

ル・カインがザカールで出撃した直後、ロアンは整備済みのトライポッドキャリアを調達して、すぐにエイジたちと合流した。そして、レイズナーMK-IIと二機のドールを搭載して、発進したのだった。

「ザカールの動きはどうなんだ？」

「変わりませんね。衛星軌道上の刻印に相対速度をあわせて、同じ軌道を巡っています。僕たちも、あと一時間で接触できます」

ロアンはいぶかしげな表情を浮かべる。ザカールはすでに刻印を射程距離のうちに捉えたはずだ。なのに何故、攻撃が行われていないのか。刻印の正体や機能がわからず、手を出しかねているのかもしない。

(しかし、僕にはもっと個人的な感情——ル・カイン閣下の想いがそこにあるよう感じた……)

刻印のうちにいるであろう、ジュリアへの想い。訪れるであろうエイジと、決着をつけたいという想い。それらがザカールの攻撃を、思いとどまらせていくのではないだろうか。

ロアンの想像は正しかった。ル・カインは衛星軌道上で、刻印を捕捉することに成功したが、即座に攻撃することをためらわせる何かを、この巨大な物体に感じていた。

(何故だ……この宇宙に、お前の空気を感じる。ジュリア、お前はこの物体の中にいるのか……)

その時、ル・カインの注意を喚起しようとして、ザカールの管制コンピュータがアラームメッセージを発した。

「MF一機、レンジ3に確認、レンジ2に接近、レンジ1に侵入！」

(速い……！)

蒼き流星が、ザカールの眼前に瞬間的に出現した。いや、ル・カインの視力をもつてしても、そう見えるほどの速度で飛来したのだ。蒼き流星と見えたのは、ル・カインにとって初めて眼にする機体である。

だが、彼はクスク戦線におけるレイズナーメーカーMK-IIのめざましい活躍を、司令室からモニター越しに見ていた。そして、エイジの新しい乗機であることに、気づいていた。

(ようやく私の前に現れたか……アルバトロ・ナル・エイジ・アスカ)

エイジもまた、数週間前に敗れたザカールを目の前にして、またあのヘレッドパワーと対決することになるのだ——と思いつた。

(俺はある力に勝てるのだろうか……)

いや、勝てなくてもいい。負けさえしなければよいのだ。刻印が発動するまで、守り続けることさえできれば……。

「ル・カイン、姉さんは指一本、触れさせないぞ！」

グラードス軍の一般周波数帯を通じて送られてきた通信が、ジュリアの存在を感じた予感が正しいことを証明する。

「エイジ、この巨大な物体はなんだ！ ジュリアはこの中で何をしようとしている!?」

「答える必要はない！」

「ならば、実力で聞き出すのみ！」

ザカールの機体が、紅い流星と化す。レイズナーメーカーMK-IIも再び、蒼き流星となり、二筋の光は刻印の周囲で激しくぶつかり

合つた。

V-MAXは、近年になつて主力SPTに搭載されるようになつた、非常戦闘システムである。内部にLCMパウダーを散布したマグネットイック・フィールドを機体周囲に形成して、各部スラスターのアフターバーナーを使用することによって、高機動性を確保し、攻防が一体となつた戦いを展開するのだ。

ザカールのレッドパワーは、推進系に添加剤を賦与することで、このV-MAXにさらなるパワーを与えていた。それに対し、レイズナーマク-IIのV-MAXIMUMは、強電磁界の磁束密度を上げることで、対弾性などを向上させている。つまり、スピードのザカールと、攻防をより充実させたMK-II——という対比が成立する。

エイジヒル・カイン、生まれも思想も大きく異なる二人の男は、いま二筋の流星と化し、激しく激突を繰り返していた。

刻印の内部で、ジュリアは心を痛めていた。外界の状況は、刻印が直接、ジュリアの知覚に伝えてくれる。ぶつかりあう着と紅の流星——エイジヒル・カインの争いは、そのまま相容れることのない二つの星の運命を象徴しているよう、彼女には思えたのだ。

知覚を連結させたジュリアにしか理解できない信号で、刻印の制御知能が合図を送つてくる。“発動”の準備ができたのだ。同意を意味する思念を返しながらも、ジュリアは同時に、刻印に対する提案を発していた。

機体が軋み、操縦者の肉体にも巨大な苦痛がフィードバックされる。それでも、エイジヒル・カインの戦いは続いていた。本星から見捨てられ、地球での基盤を失つてしまつたル・カインには、本来ならこれ以上戦う理由はない。だが、それを認めることは、彼の誇りが許さなかつた。

「エイジ、私はお前たちを赦しはしない……！」

その戦いの様子を、トライポッドキャリアの内部でデビッドやロアンたちも見守つていた。

「くそつ、なんでこんな時に指をくわえて見てるしかないんだ！」

デビッドが叫んだのも無理はない。彼らはレイズナーマク-IIの他にも二機のSPTを搭載してきていたのだが、それは二機ともドールであった。完全に重力下での運用を想定して設計されたドールには、宇宙空間での戦闘力はない。何も持たずに来るよりは……との考へで積み込んだのだが、それは逆にデビッドやシモーヌたちにとっては、かえつてストレスを積もらせる要因となつていて。

また、デビッドたちは違つた複雑な感情を抱く者がいる。ロアンにとつて、エイジヒル・カインはともに失いがたい友であるのだ。だが、ル・カインの矜持にとつて、エイジとの決着が不可欠であることも、彼は承知している。たとえ二人の戦いを直

視することがどんなに苦痛をともなうとしても、眼をそらすことはできない……ロアンはそう思うのだ。

だがその時、彼らが見守る前で、レイズナーMK-IIとザカールに異変が発生した。二つの機体を閃光が包んだかと思うと、一瞬のうちにその姿がかき消されてしまったのである……。

2

——自分がどこにいるのか、ル・カインにはわからなかつた。穏やかな緑の光に包まれた、不思議と懐かしさを感じる世界。「ここは刻印の内部です……」

いつの間にか、ジュリアが目の前に浮遊している。その向こうにはレイズナーMK-IIも見える。無重力だが空気は存在していることを知つたル・カインは、コクピットハッチを開いて叫ぶ。

「ジュリアよ、我が問いに答えよ！ 刻印とはなんだ、お前はここで何をしようと言うのだ！」

「これは……先住グラドス人が、愚かな私たちのために残してくれた遺産です。この刻印を発動させれば、地球とグラドスの間の空間が歪められ、超空間航法ができるくなるのです」

「なんだと……！」

ル・カインの脳裏で、いくつかの考えが閃く。刻印によって地球が封鎖されてしまえば、本星からの艦隊と戦わなくてすむ。だが、それでは意味がない。ル・カインはこの地球で理想国家の建設を実現し、それを硬直した階級社会であるグラドス本星にまで敷衍したいのだ。

「そんなことは……断じて許さん！」

「ル・カイン、姉さんは触れさせないと言つたはずだ！」

白いパイロットスーツが、ル・カインに体当たりしてくる。たまらずに、ザカールの機体に叩きつけられるル・カイン。エイジは容赦せずに、殴りかかってきた。だが、黙つてなすがままにされているル・カインではない。エイジの拳を手甲でさばくと、鳩尾に痛烈な蹴りを叩き込んだ。

二人の争いを、ジュリアは正視しがたく思いながらも、視線をそらすことはしなかつた。S.P.Tに乗つての戦闘よりはまだ良いと考へて、あえてこの空間に彼らを招き入れたのだから。

「貴様らの矮小な感傷のために、私の理想を汚されたたまるか！」

「俺は、そのお前の思い上がりが赦せない！」

そして、ついにエイジの一撃は、ル・カインの身体を一方の内壁にまで吹き飛ばした。背中に強い衝撃を受け、息を詰まらせるル・カイン。痛みよりも屈辱に耐えようとする彼の眼前に、ジュリアが現れる。

「姉さん、近づいたらや駄目だ！」

「大丈夫です、エイジ」

「ジュリア、貴様を殺せば刻印の発動は止まるのであろう。私がためらうと思うのなら、それは大きな間違いだ！」

「ル・カインさま、発動はすでに始まっています。たとえ、私を殺めたとしても、刻印が停止することはありません……」

「なに？」

その時、彼らの周囲から巨大なシステムの唸りが響いてきた。ル・カインとエイジは、期せずして同時に、周囲を見渡した。

古代文明がどのようなシステムを構築したのかわからないが、刻印は膨大なエネルギーを時空に向けて、放出し始めている。

「くつ、いつの間に！ だが、認めん、私は断じて認めん！ このような結果など……！」

もはや、エイジにもジュリアにも一瞥もくれず、ル・カインはザカールに乗り込んだ。そして、闇雲にレーザードガンを乱射する。

「やめろ、ル・カイン！」

エイジはザカールを制止しようと、レイズナーメーク-IIに乗り込んだ。

まさにその時だった。刻印の発動が最終段階に至ったのは——

時空が揺れ、軋みの音をたてる。そんな光景を、デビッドたちは間近で目撃した。もちろん、時空連続体の歪みが、そのまま視覚で捉えられるわけではない。だが、空間の特性そのものが変質する気配は、視覚情報以上の存在感を持つて、その場に居合わせた者たちの五感を刺激するのだった。

「……！」

激しい嘔吐感を感じたアンナが、床に座り込む。他の仲間たちも多かれ少なかれ、その感覚を共有していた。

衛星軌道上で発生した時空の歪みは、地球全体に少なからぬ影響を与えただろう。だが、刻印の全近にいた小型母艦が受ける衝撃は、その比ではない。

「なんなんだよ、こいつは……！」

刻印が空間を歪めようとする圧倒的な力が、トライポッドキャリアを、波間の小舟のように翻弄する。そして、小舟は次の瞬間、大波の頂点から放り出された。

「こ、これ……なにが起きてるの！」

果でない空間を越える衝撃が、デビッドやシモーヌたちの身体を突き抜ける。初めて経験する、その巨大な違和感に、彼らはいつしか意識を失っていた……。

「跳躍」を経験したのは、エイジも同様だった。バラバラに分解された全身が再構成されるかのような感覚の後、意識と肉体を結ぶ神經回路がようやく現実感を伝達し始めた。

（いつたい、何が起つたんだ……？）

発動する刻印の中でジュリアが悲鳴を上げる光景が、エイジが見た最後の記憶だ。原因はわからないが、刻印の発動にトラブルが生じたらしい。それだけは理解できた。

（みんなは、どうしたんだ……？）

エイジはレーダーでトライポッドキャリアの位置を探し求めた。さほど苦労もせず、それは見つかった。だが、エイジは事態が容易ならざる展開を迎えていたことを、悟らざるを得なかつた。

トライポッドキャリアは、無数の艦艇群に包囲されていたのである。

3

グラードス暦12963-3002——エイジがブルドリア太陽系に帰還した日付である。

レイズナ-IMK-IIとトライポッドキャリアは数十光年の距離を跳躍し、惑星グラードスが属する恒星系に運ばれたのだった。レイに記録されていた座標データと、トライポッドキャリアによる観測結果の双方が、それが事実であると告げている。

どのような現象の結果、そのような事態となつたのかはわからない。だが、最優先でなすべきことは、現状の分析ではなく、目の前の艦艇群への対処だった。

エイジはデビッドたちを説得し、自分たちをいち早く発見した艦艇群に投降することにした。

「ここがグラードスの太陽系だとしたら、あれはグラードス軍だろ！ 戰わずに敵に降伏するのか？ あの時のように！」

デビッドが口にしたのは、三年前のことだ。エイジの先輩でありジュリアの婚約者だったアーマス・ゲイル率いる母艦に、彼らのトライポッドキャリアは投降することになつたのだ。ゲイルとその副官であるカルラの考え方の違いから、母艦の内部で混乱が起き、エイジたちは辛くも脱出することができた。それがかなわなかつたら、彼ら七人は人間扱いもされず、野蛮な生物としてカルラに処刑されていただろう。

デビッドが憤るのも無理はない。しかし、状況は三年前と同じく、多くの選択肢を与えてくれはしない。投降するか、絶望的な戦いを挑むか。

「デビッド、気持ちはわかる。だけど、彼らは僕らが意識を取り戻す前に攻撃することもできたのに、そうはしなかったんだ」「投降を勧めてきた通信文も極めて紳士的でしたね」

エイジの言葉を支持するように、ロアンも言った。

「だけどなあ！」

デビッドが反発しかけるが、もはやそれは本気ではない。受け入れがたい事態を受け入れるための、彼の儀式のようなものだ。アンナは思わず、笑みを浮かべた。ロアンとデビッドが相反する主張をぶつけ合い、結局はエイジの判断を受け入れる。それは三年前、幾度となく繰り返された光景だったのだ。

地球の敗北とグラドスによる支配——様々な変転を経たものの、仲間たちの絆はようやく取り戻すことができた。その思いが、アンナを微笑ませたのだった。

エイジたちはトライポッドキャリアを艦艇群の旗艦に接舷させ、仲間たちとともに移乗した。そこでエイジを出迎えたのは、意外な——そして、旧知の人物だった。

「エイジ、エイジじゃないか！」

「……父さん！」

エイジを出迎えた人物たちの一人は、ケン・asca——エイジの実父であった。地球人であるケンが一人の人間として扱われ、尊重されている。そのことがデビッドたちの警戒心を解きほぐし、彼らとヘグラドス反政府戦線グループとを融和させることになる。

「たくましくなつたな、エイジ。見違えたよ」

ごく平凡な親子の会話を目にして、アンナたちも和やかな心地となつた。そして、ケンの感慨に、自分も同じような気持ちだつたと思い出す。

(三年前、グラドスとの戦いの前に離ればなれになつて——久しぶりに会つたエイジは、本当に変わつていたもの……)
もつとも、アンナが見た三年ぶりのエイジは、彼女の窮地を救うために物乞いを演じていたのだから、変わつていたどころではない。

その演技の姿を置いておくとしても、エイジは容姿も体型も言葉遣いも、多くが変わっていた——変わらざるを得なかつたのだろう。エイジがいすこかで過ごしていた日々の過酷さを、悟らざるを得ない変化だつた。

アンナたちよりも、離れていた日々が長かつたケンにとつては、そうした想いはさらに強かつたに違いない。

「——我々がここへ現れたのは、おそらく、刻印の発動が不完璧だったからだと思われます」

エイジのその推測は、反政府戦線の科学者たちからも支持された。グラドスの超空間航法をもつてしまつても、地球からグラドスへは一ヶ月を要する。にも関わらず、レイズナーMK-IIとトライポッドキャリアのメモリーに残された記録によれば、エイジたちは瞬間的にそれだけの距離を跳躍してきたことになつてゐる。この異変に未知のハイテクノロジーが関与していることは、疑いない。

(先住グラドス人は、あえてこの技術をグラドス人に伝えなかつたんだろうな……)

エイジはそう思つ。それは悲しい判断だが、正しかつたに違いない。グラドス人が自ら超空間航法を編み出す前に、先住グラドス人の技術で地球に到達していたら——。

おそらく地球人は文明を生み出す前にグラドス人に滅ぼされるか、隸属することになつたに違いない。現在の地球を彩る豊かな文化も、誕生しなかつたはずだ。

「そ、うだな……だが、私は希望を捨ててはいないよ、エイジ」

地球で起きた様々な事情を聞き終えたケンは、この数か月間にグラドス本星で発生した様々な事変の説明を語り始めた……。

——惑星グラドスにおける支配者階級は、世襲によつて定められている。だが、彼らが国家としてのグラドスの政策を決定しているわけではない。先住グラドス人が遺した神聖マザーコンピューターこそが唯一の最高決定機関であり、すなわちその裁定こそが“グラドスの意志”となるのだ。

三年前、その神聖マザーコンピューターが地球侵攻を決定した。国家間の対立を解消せぬまま、いたずらに軍備の増強を続けつつ宇宙進出を果たした地球人類は、グラドスにとつて……いや、宇宙全体にとつて害をなすと、神聖マザーコンピューターは判断したのである。その判断に基づき、グラドス軍は電撃的に地球を占領した。

だが、その行動は、本当に正しかつたのであろうか？

地球人の果てしない軍拡を掣肘する——それだけならば、まだ良い。だが、地球文化を根絶してグラドス文化を押しつけるなど、大義なき侵略に他ならない。以前から、グラドス人の科学者グループは、神聖マザーコンピューターからすべての決定権を

取り戻すべきだと、支配者階級に対しアピールし続けてきた。

しかし、幾万年の過去より、常に神聖マザーコンピューターの指示を受けることを当たり前とし続けてきた支配者階級の多くは、その主張に耳を貸そうともしなかった。

「すでに滅び去った種族の亡靈に従い続けているのさ、我らがグラドス人は……」

同席していたグラドス人科学者の一人が、自嘲気味に笑つてみせた。

「そう露悪的になる必要もないだろう。現に君たちはこうして、神聖マザーコンピューターの打倒を目指している」

ケンが言う通りだつた。支配者階級の多くが先住グラドス人の亡靈に支配されているといえど、それがすべてではない。『グラドス創世の秘密』を知る一部の支配者階級が、その全貌を科学者グループに開示したのだ。

これまで、グラドス人の種族的ルーツを研究していく了史学者たちは、ミッシングリンクを埋める事実に納得した。生物学者は、ケンがグラドス人ととの間に子をなした事実を説明できる真実を歓迎した。彼らにとって、地球人とグラドス人が同根であるという説はすでに、蓋然性の高い予測であったのだ。

しかし、それらを一般民衆に公開しようという試みは、支配者階級とそれに従う軍部によって、すべて潰された。

だが、圧力というものは時に、巨大な反発力の母体ともなる。理不尽な情報統制に反発した科学者たちは、△グラドス反政府戦線グループを組織したのだ。

彼らは実働戦力を組織するに当たって、ブルドリア太陽系の外にそれを求めた。グラドスは複数の恒星系を植民地として統治しているが、その多くが本星による圧政に苦しめられていたのだ。

支配者階級の打倒は、彼ら植民惑星にとつても大きな希望だ。反政府戦線は、彼ら自身の予測をも上回る戦力を編成することに成功した。そして、本星への進攻の途上、エイジたちのトライポッドキャリアを発見したのである……。

「いやあ、僕らを征服するよう決めたのがコンピューターだったなんて、まったく驚かされるよねえ！」

「アーサー、あなた、わかりきつたことを延々と繰り返さないでよ。イライラするじゃない！」

「こ、ごめん、シモーヌ……」

グラドス本星でも情報統制が敷かれていた上、ル・カインが意図的に本星とのつながりを絶とうとしていたためであろう。グ

ラドス軍部を中心とする支配者階級と反政府戦線の一触即発の対立関係は、地球占領軍の中核にいたはずのロアンでさえも、まったく知らなかつた。

「これから、私たちは……どうするべきなのかしら?」

エリザベスの嘆息まじりの言葉に、デビッドが即答する。

「決まつて! グラドス内部のゴタゴタなんて、関係ない。俺たちはすぐ地球に戻つて、新任総督とやらの艦隊と戦うべきだぜ!」

反政府戦線は、彼らが地球に帰還するなら、超空間航法を可能とする航宙艦を提供しようと申し出てくれたのだ。デビッドの主張は、彼自身にとってはもっとものだつたのだが、シモーヌの視線が抗議の色を含んでいる。デビッドはすぐに、それが親友にとつての切実な問題であつたのだと気づく。

「す、すまない、エイジ……」

「いいさ、地球がたいへんなのも確かなんだ」

「先ほど聞いた話では、現在、地球へ向かっている艦隊の戦力は、三年前のグレスコ艦隊の戦力と、ほぼ同等だそうです……」

反政府戦線から提供された情報を、ロアンが分析する。

「ということは、我々が戻つたぐらいで、戦況に変化が起きるとは思えません」

グレスコ艦隊との決戦時、地球人類は国家という枠組みを越えて、手を取り合つた。そして、エイジたちも奇跡を起こそうとしたのだが、それはかなわなかつた。

あの時に比べて、地球人もS.P.Tの開発には成功している。だが、組織的抵抗力を奪われたレジスタンスでは、あの時以上の戦いができるようはずもない。

「奇跡を起こせる確率は……三年前よりも低い」

反論しようとして、さすがにデビッドも黙り込む。彼とて、そのぐらいのことは理解していた。絶望的な空気が、一同を支配する。だが、ロアンの言葉はそこで終わつていなかつた。

「でも、僕たちの目的は勝利じゃない。地球の解放と独立です。だとしたら……また違う確率計算が成り立つんじゃないでしょうか」「どういう意味なの、ロアン?」

「僕たちが今なすべきことは、グラドス反政府戦線グループとの共闘だと思うんだ」

ロアンは順序立てて、自分の考えを説明した。もしも反政府戦線が神聖マザーコンピューターと、それを支持する勢力を打倒し得たなら、グラドスは極めて民主的な社会体制のもとに再生する可能性がある。民主的な国家となつたグラドスとなら、講和を結んで、平和共存することも可能ではないだろうか……。

エイジやデビッドたちの表情に理解の色が、そして希望の光が浮かんでくる。

「なつるほどなあ！　さすがはロアンだ。じゃあ、パッパとマザーコンピューターとかを倒してさ、グラドスの人たちと講和しようよ！」

浮かれながらまくしたてるアーサーの無邪気な表情に、シモーヌが今度は吹き出してしまった。

「ア、アーサー、あなたって本当に……」

「な、なんだよ、シモーヌ？」

いつの間にか、シモーヌの笑いは、他の仲間たちにも伝染していた。腹を抱え、涙を流しながら、デビッドはアーサーの背中を張り飛ばした。

「たいしたもんだよ、アーサー！　みんな、大将の言う通りだ。パッパと戻つけて、平和を手土産に地球へ帰ろうぜ！」

エイジもアンナもロアンもシモーヌもエリザベスも、口々に賛同する。ともあれ、目標は定まったのだ。その日のうちに、エイジはケンと反政府戦線の代表者のもとへ向かい、共闘を申し出た……。

5

旗艦の一室で、エイジは父と、三年ぶりにゆっくりと話す時間を持つことができた。ケンとアイラは、エイジが地球へ向かつた際に軍部に逮捕され、拘禁されていたらしい。だが、反政府戦線が同志を救出するために軍刑務所を襲撃した際に救出され、行動をともにすることになった。エイジの母アイラも、反政府戦線の後方で働いているという。互いの三年間を教えあつた後、二人の話題はジュリアの行方へと移つた。

「そうか、刻印が暴走した時から行方が……」

「姉さんも俺たちと同じように、グラドスに帰ってきてる……そう信じてるよ」

「ああ、そうだな……」

やがて、父と子は戦いが終わった後の再会を約して、別れた。エイジは仲間たちとともに、トライポッドキャリアで反政府戦線の攻撃部隊に合流するのだ。ケンはグラドス本星へ降下して、地上支援に参加する。三年前の明日をも知れぬ別離に比べれば、それは心を痛める必要のない、希望に満ちた一別に過ぎなかつた。

反政府戦線攻撃部隊の戦略目標は、グラドス本星の静止衛星軌道上に定位する△オリジナル・ステーション▽である。ここに、

神聖マザーコンピューターの本体が收められているのだ。

ケンラを含む科学者グループが地上で陽動作戦を行い、宇宙戦力はオリジナル・ステーションへ総攻撃をかける。これが、ごく単純化した反政府戦線の基本戦略である。

わずか数日の間におきた目まぐるしいほどの状況の変化に戸惑いながら、エイジたちは反政府戦線の艦隊に合流した。

「よろしく、私が部隊司令のホアムイだ」

「アルバトロ・ナル・エイジ・アスカです」

気さくな人柄なのであるう、軍部を裏切つて反政府戦線についたにも関わらず、その表情は明るく、エイジと仲間たちにも親しげに話しかけてくる。

「私は期待しているんだ。我々グラドス人と君たち地球人が、手を取り合つていける日をね……」

ホアムイ提督がデビッドたちに語りかけたその言葉には、單なる社交辞令には含まれないであろう真摯な想いが感じられた。こうであつてこそ、自分たちも本気で戦える。デビッドたちにも、ようやくそう思えてきたのだった。

攻撃開始の前夜、ホアムイ提督の旗艦格納庫を借りて、エイジはレイズナーMK-IIを整備していた。かたわらではアンナが作業を手伝つてくれているが、その手元はおろそかになつており、単純なミスが幾度か繰り返されている。

「疲れてるんだろう、アンナ。もう休んだ方がいい」

「…………うん、平気。はやくの整備を終わらせて、エイジにこそ休んでほしいもの」

エイジの気遣いに、アンナはそう答えていた。実のところ、アンナは自分の疑念を口にしようとは思つていなかつたのだ。大きな戦いを前に、答える出ない疑問を共有させても、意味がない——そう考えていたからだ。アンナにとって、疑間に答えを得ることよりも、エイジが無傷で帰つてきてくれる方の方が、遙かに大事なことだつた。

それでも、疑念そのものが消えるわけではない。
（先住グラドス人は私たちのことを案じて、グラドスの刻印を残してくれた。なのに、彼らが遺したはずの神聖マザーコンピューターが、何故、地球を……）

アンナは頭を振つて、その疑問を忘れようとした。いまは、明日の戦いでエイジが生き残る確率を高めるための努力をしよう。すべてはその後でいい。

——そして、二つの星の命運を決する戦いが始まる。

第4章

終焉



オリジナル・ステーションは、数百年前まで、神聖マザーコンピューターとその保守機構のみが存在する、小規模な人工衛星だった。だが、オリジナル・ステーションの保守点検を使命と定められたある一族が、自らを「支配者階級」と称し、宇宙へ移住したのである。彼らはオリジナル・ステーションの周囲に、自分たちの居住区やグラドスの政治中枢などを司るブロックを新設した。現在のオリジナル・ステーションは全長二〇〇キロにも渡る、巨大宇宙都市となっている。もちろん、そこにはグラドス軍の最高司令部も置かれ、最大の兵力集中拠点ともなっている。

だが、幾世代にも渡つて天空から支配され続けてきた一般大衆の反発が、科学者グループの指導とプロパガンダによって一定方向に収束され、ついにオリジナル・ステーションへの総攻撃の日を迎えたのである。

「狙いは神聖マザーコンピューターの破壊のみ！ それが叶えば、支配者階級の者どもは統率を失った鳥合の衆と化すはずだ！」ホアムイ提督の指揮に従つて、反政府戦線の艦隊が攻撃を開始する。彼らはグラドス軍の標準的な編成に従えれば、三個艦隊にも匹敵する宇宙戦力をこの作戦に投入していた。長い時間をかけて、各殖民星から集めた戦力を統合したものだ。一作戦に投入される戦力としては破格の量ではあるが、ここで敗北すれば、彼らには後がない。

まず第一段階として、艦隊主力による大出力レーザーと、ミサイル群による攻撃が開始された。この時点では、エイジたちには出番はない。トライポッドキャリアに乗り込んだ彼らは、反政府戦線が編成したオリジナル・ステーションへの突入部隊の一角に加わっているのだ。

「なんだか、信じられないわね……」

「ええ、まったくです」

エリザベスの言葉に、ロアンが応える。ほんの三年前まで、彼らは隣の惑星に行くことさえ、生涯の大イベントとなるような日々を送っていたのである。それがいま、地球から数十光年の彼方で、異星文明の行く末を決する戦いに加わっているのだった。彼らが見るモニターには、オリジナル・ステーションへ向かっていく、無数の光芒が映し出されていた。

「なんだか、レーザーとミサイルで全部終わっちゃいそうだよねえ」

「そんな事にはならないよ。あの攻撃は敵の防衛網に穴を空けるためのものなんだ。ステーションそのものを破壊してしまうな

「いよいよ、加減している」

「なんでだよ、エイジ。ステーションごと破壊してしまった方が楽だろう?」

「アーサー、あなたもう少し考えて発言なさいよ。あそこには軍人以外の人もたくさんいるのよ」

「あ……」

「反政府戦線だって、無駄な殺戮は避けたいに決まっているじゃない」

シモーヌの言葉に、デビッドもうなずいた。そんな光景を見て、エイジは嬉しく思う。彼らにとつて、グラドス人＝敵という認識はなくなり始めていたのだ。

(そうだ、グラドス人の中に敵もいれば、味方もいる……それだけなんだ)

だつたら、味方が増えるように行動すればよい。そうすれば、自然と争いはなくなっていくはず。幼い道徳論のようだがそれが真理であると、二つの星の人々に接したデビッドたちは、感じるようになっていた。

「勇敢なる地球人諸君！ 先鋒分艦隊が敵の防衛ラインを突破しつつある！ 我々も五万キロほど前進するぞ！」
「了解！」

突撃部隊司令部からの指示に応え、エイジはトライポッドキャラリアを前進させる。司令部からの通信を聞くまでもなく、味方が押し気味に戦いを進めていることは、戦場に飛び交う雑多な通信波を拾つていて確認できた。

「このままだと、遠からず、俺たちも突入することになるだろう。アーサー、ここを頼む。デビッド、ロアン、S.P.T.の準備を！」

「おお！」

「まかせてください！」

アーサーがトライポッドキャラリアの操縦席につき、エイジたちはS.P.T.の搭乗口へ向かう。オリジナル・ステーションの内部には人工重力が働いているため、地上戦用のドールでも、充分に活躍できるはずだ。

「このトリオで出撃するのも、ずいぶん久しぶりだな！」

搭乗口の前で、デビッドがニヤリと笑った。

「そういえば、そうですね……」

「エイジ、今度は俺たちを置き去りにして、一人で突っ込むってのはナシだぜ」

デビッドが言っているのは三年前、グレスコ艦隊との決戦のことだ。

「わかったよ、デビッド」

エイジが右手を差し出した。デビッドとロアンがそこに自分の手を重ねる。シモーヌとアンナとエリザベス、そしてアーサー

も……。

「無事に帰ってきてね……」

不安気なアンナの声に、エイジが応える。

「大丈夫さ、俺たちはみんなで帰るんだ。美しい故郷、地球へ……」

その場にいた誰もがうなずき、そして、次の言葉を一斉に発した。

「……七人の仲間で！」

2

拠点防衛用に開発されたMFガンスティードが、機体の壁を築いている。反政府戦線のSPTは、頑強な抵抗の前に、破竹の進撃を一時停止させられた。オリジナル・ステーション周囲の制宙権を確保した反政府戦線は、SPT隊を搭載した小型艦を次々と制圧したドッキングポートに送り込み、“上陸”を成功させた。

オリジナル・ステーションの防衛部隊は、どうやら居住区での戦闘を避けるため、中枢ブロックに最終防衛戦を構築しているようだった。この中枢ブロックこそ、先住グラドス軍が残した人工衛星に他ならない。居住区に被害を出したくないという思惑は、反政府戦線側も同じくするものだ。両軍の無言の合意によって、前線は緩やかに奥深くへ移動しつつあった。

頑強な壁のごとき守備隊との交戦は、一進一退のまま、なかなか進展を見せない。いたずらに無謀な突破を試みた反政府戦線のSPTのみが、反撃の砲火を浴びせかけられ、むなしく潰えていく。

「やはり、V-MAXIMUMを使うしかないか……」

集団戦闘の最中においてV-MAXIMUMを使うには、大きな問題点がある。十分間の著しい機動力と戦闘力の向上の後、機体を急速冷却する時間が生じてしまう。わずか五分程度とはいえ、その間は完全に機動不可能となる。敵の増援がいつ現れるかわからない戦場において、うかつにこの機能を使うことはためらわれていたのだ。だが、次第に増えつついく味方の犠牲と、それに反比例して時間は失われていく。エイジが決意を固めようとした時——その報はもたらされた。

「——敵の増援!?」

衝撃が反政府戦線の内部を駆け抜ける。グラドス軍の大艦隊が、このオリジナル・ステーションに向かいつつある……グラドス地表

「この学者グループを通じて、その情報がもたらされたのだ。だが、それはエイジたちにとっては、爆発的な喜びをもたらすことになる。」「これで地球は救われる！」

そう、地球へ向かったはずの新任総督の艦隊が、グラドス本国の事態急変に際して、帰還してきたのだった。

自分たちの戦いが報われたことを知ったエイジとデビッド、ロアンは狭いコクピットの中で、歓喜を爆発させた。だが、地球が救われたという事実は、一方でこの戦場の情勢がさらに危険なものになつたことを意味している。敵艦隊が来援する前に神聖マザーコンピューターに辿り着かねば、反政府戦線の無惨な全滅と崩壊は必至である。

そうなればグラドスの体制が変わる機会は失われ、地球はふたたび、苛烈な支配を受けることになるだろう。

「……デビッド、俺がV-MAXIMUMで突撃する」

「なんだって、エイジ！ だけど……」

「活動停止はたつたの五分だ。その間、守っていてくれ。君たちを信じてる」

「わ、わかりました……」

ロアンもデビッドも自機のコクピットでうなずいた。たとえ困難でも、やるしかない——その想いをエイジと共有したのだ。

エイジはボイスコマンドをレイに告げた。

「レイ、V-MAXIMUM発動！」

レイズナーMK-IIが、閉鎖空間の内部で蒼き流星と化した。咆哮のごとき電磁波のノイズをまき散らしながら、蒼き流星は守備隊の防衛線へ向かっていく。無数のガンステイドがレーザードガンを乱射するが、高密度のマグネットイック・フィールドに射線を湾曲され、MK-IIへの直撃弾はない。

「うおおおおっ！」

エイジの絶叫とともに、MK-IIは敵の中心へ突入した。レーザード・ライフルで牽制しつつ懷に飛び込み、守備隊の機体群をマグネットイック・フィールドで弾き飛ばす。電磁界の中へ突進してきた敵機には、ナックルショットを叩き込んだ。圧倒的な戦闘力の前に、ガンステイドが次々と倒されていく。

「今です、前進を！」

驚異的なV-MAXIMUMの力に瞬間的に呆然とした反政府戦線のSPT隊は、ロアンの通信で我に返った。そして、先陣を切るデビッドのドールに続いて、突撃する。

一方的な蹂躪に防衛線は崩壊したものの、守備隊の數的優位はそのまま趨勢を決定させはしなかつた。デビッドとロアンも、人工重力とはいえ、ドールの能力を最大限に活かせる戦場に奮戦している。ドール、ブレイバーといったグラドス軍の一般的

な量産機を戦力の中核とする反政府戦線も、ガンステイドを相手によく戦った。

だが、ついにレイズナーMK-IIがタイムリミットを越え、活動停止してしまった。

「MF、加熱中…作動不能…」

レイズナーから移植された管制コンピューター・レイが無情に告げる。デビッドが案じたように、MK-IIは敵地の中心で活動停止してしまったのである。

「エイジッ！」

乱戦の中、デビッドとロアンのドールがMK-IIに駆け寄ろうとした。一機は必死にMK-IIを守ろうとするものの、いまだその数を残している守備隊のガンステイドは、好機とばかりに激しい砲撃を加えている。

「くつ、このままじゃもたない。デビッド、ロアン、逃げてくれ！ このままじゃ、君たちもやられる！」

「馬鹿野郎！ 三年前に俺たちがどんなに情けない想いをしたか、わかんねえのかよ！」

「そうです！ 今度は最後まで一緒に！」

「デビッド、ロアン！」

わずか五分の活動停止時間が、永遠にも匹敵するほどに感じられる。だが、ついにいかなる弾幕をもってしても防ぎようのない数のミサイル群が、ガンステイド隊から放たれた。そして、次の瞬間、エイジたちは見た。

——紅い流星を！

「ザカール……ル・カインか！」

死んだかとも思っていた男の名を、エイジが叫ぶ。突如現れた黄金のSPTは、レッドパワーヴィMAXでガンステイド隊を蹴散らしていった。窮地を救われたレイズナーMK-IIも、ついに活動停止時間を終え、反撃を開始する。

エイジの呼びかけに、ザカールのバイロットは応えようとしない。それでも、それがル・カインであることを、エイジはわずかほども疑わなかった。

(この機動、この射撃……間違いない。あいつは生きていた！)

かつて、地球で幾度となく戦った相手である。その戦術、そのクセ、すべてを皮膚感覚で覚えていた。覚えているが故に、肩を並べ、連携することも容易だった。いつしかレイズナーMK-IIとザカールは、敵機の中心で背中をあわせて戦っていた。

この意外な救援に勢いづけられた反政府戦線は、ついにガンステイド隊を殲滅、神聖マザーコンピューターへの最終防衛戦を突破したのである。

「一別以来だな、ロアン・デミトリッヒ……」

「はつ、閣下……」

エイジたちは奇妙な縁で同行することとなつたル・カインとともに、神聖マザーコンピューターを目指していた。通信回線が開くとともに、以前と変わらぬ声音で、ル・カインがロアンに語りかける。

「何を怯えている。らしくないぞ、ロアン・デミトリッヒ」

「も、申しわけありません……」

「心配するな、預けた生命、今ここで取り上げようとは思わん」

「ル・カイン！」

ザカールと併走するドールの後方から、レイズナーメークーIIのエイジは通信回線に割り込んだ。

「なぜ、俺たちを助けた。お前はここで何をしている……！」

「貴様に絶望を与えるためだ……」

「なに！」

「神聖マザーコンピューターを破壊することは、貴様にはできん」

「どういう意味だ！」

「行けばわかる」

その言葉を最後に、ル・カインからの通信は途絶えた。だが、ザカールは明らかに神聖マザーコンピューターが位置するステーション中心部を目指している。エイジは納得しきれないものを感じながら、その後に続いた。

「これは……！」

そこでエイジたちが見たものは、無数の守備隊SPTの残骸、そして――

「神聖マザーコンピューターが……」

反政府戦線の兵士たちも驚く。グラッドスに君臨していた機械仕掛けの支配者は、すでに原型を留めぬまでに破壊されていたのである。

「見ての通りだ。神聖マザーコンピューターは、私が破壊した」

「なぜ……」

「知れしたこと。誇り高きグラドス人が、すでに滅びた種族に支配されているなど、断じて赦せんからだ！」

……地球の衛星軌道上において、発動を阻止せんとしたル・カインの行動が、グラドスの刻印を暴走させたことは、エイジたちも知るところである。彼らと同じように時空を超えたル・カインとザカールは、オリジナル・ステーション至近の空間へ出現し、救出されたのだった。

かつて、地球でグレスコの地位と権力を引き継いだ際、ル・カインは自分の知らなかつたグラドス創世の秘密と、グラドスの支配構造に関する最高機密を調べ尽くした。その結果、神聖マザーコンピューターによる支配の構造を知るに至つたのである。その時から、胸のうちに火は燃えさかっていた。唯々諾々と亡靈に支配されていながら、『支配者階級』を称する者たちへの、怒りの火が。

オリジナル・ステーションに収容され、グレスコ提督の実子として、支配者階級に準じる扱いを受けたこと。そして、反政府戦線の攻撃が開始されたことがともに奇縁となつて、火は炎へと成長した。そして、誇りと矜持の命じるままに、神聖マザーコンピューターを焼き尽くしたのである。

「これで、我々は眞の自由を得ることができた！」

「我々は過去の亡靈から解放されたのだ！」

反政府戦線のメンバーが驚喜する。だが、彼らのSPTに向かつて、ザカールがいきなり砲撃を加えた。

「笑止！」

不意をつかれたSPTが次々と直撃を受け、倒れていく。

「何をするんだ、ル・カイン！」

貴様らに眞実を教えてやろう。知らずにすめばよかつた眞実をな！ その神聖マザーコンピューターとやらの残骸をよく見てみるがよい！

ル・カインのさらなる不意打ちを恐れて動けない人々の中で、ロアンただ一人が堂々と機体から降り、残骸を検証はじめた。そして、驚愕する。

「これは……！」

「さすがだな、ロアン・デミトリッヒ。お前ならば、気づくだろうと思つていた」

ロアンは残骸の一部を手に取る。そして、エイジとデビッド、反政府戦線の生存者たちに向かつて、掲げてみせた。

「これは…すべてハリボテです！」

「なんだつて！」

ル・カインが狂ったような嘲笑を上げる。そこに自嘲の響きが含まれていてことに気づいたのは、ロアンだけだ。

「そう、神聖マザーコンピューターなど、ここには存在していない。いや、かつては存在していたが、それは数十年も過去のことなのだ！」

「どういうことなんだ、ル・カイン！」

「よかろう、教えてやる。貴様らも、下らぬ茶番を終わらせるがよい！」

4

ル・カインは憑かれたように、自分が知り得た真実の吐露を始めた。

――幾万年もの間、たしかに先住グラドス人が作り上げた神聖マザーコンピューターの命じるままに、グラドス人たちは生きてきた。しかし、神聖マザーコンピューターの打倒は、数十年前に、すでになされていたのである。

もつとも、当時の支配者階級の者たちが神聖マザーコンピューターを破壊したのは、ル・カインや反政府戦線とはかなり異なる動機に基づいてであった。彼らは、自分たちがさらなる巨大な権力を手にするために、神聖マザーコンピューターによる頸城を脱しようとしたのだ。しかも、その支配を確立するために、破壊したはずの旧支配者の権威をも利用し続けたのである。

「じゃあ、地球侵攻を決意したのは……」

震える声でエイジが問う。

「そう、我らグラドス人だ！」

グラドス人の文化と技術は、先住グラドス人から引き継いだものである。だが、この数万年、グラドス人は先人からの遺産をほとんど発展させることができなかつた。彼らが持っているものは、すべて与えられたものでしかなかつたのだ。

だが、地球人はその同じ時間の間に、著しい進歩を遂げた。独自の文化を育み、技術を発達させ、宇宙へ進出したのだ。

グラドス人は地球人を恐れた。このままでは、いつしか自分たちは地球人にあらゆる面で追い越されてしまうのではないだろうか、と……。

「笑うがいい。全宇宙でもつとも優れた存在を自負するグラドス人が、地球の猿どもを恐れたのだ。しかも、支配者階級は愚かしくも、その罪をも神聖マザーコンピューターになすりつけたのだ。自分たちが打倒した存在を、権威として利用したのだ……！」

この事実にもつとも衝撃を受けたのは、反政府戦線のメンバーである。彼らとて、所詮はグラドス人の選民思想に幼少より浸

り続けてきた者たちだった。選ばれた者としての自負が、先住グラドス人による支配を超克しようと望ませた部分の心理の働きに至つては、かつての支配者階級と同一と言つてよい。

「エイジ、私と戦うがよい！」

ザカールがレーザードガンをかまえる。

「ル・カイン、この上、何のために戦おうと言うんだ！ 何の意味がある！」

「私は貴様を必ず倒す……かつて、誇りにかけて誓つた。それ以上の意味など不要！」

「だが、俺にはお前と戦う理由がない！」

「理由か……よからう。貴様に戦う理由を与えてやろう。ジュリアの居場所を知りたくないか？」

「なに？」

「対一の戦いで私に勝利したなら、ジュリアのいる場所を教えてやる。どうだ？ 戰いの意味など、これで充分であろう！」

ル・カインのこの言葉に、エイジも悟らざるを得なかつた。これはもはや、不可避の戦いなのだ、と……。

「ル・カイン……今までして、お前は戦いを望むのか。いいだろう、受けて立つてやる！」

「エイジ！」

「デビッド、ロアン、もしもの時は……地球とグラドスを頼む！」

「な……！」

エイジはレイズナーMK-IIの機体を、空中へ飛翔させる。

「レイ、V-MAX発動！」

「V-MAX、レッドパワーフルチャージ！」

MK-IIとザカールは、蒼と紅の流星と化し、神聖マザー・コンピューターが收められていた閉鎖空間の内部を飛び回つた。

反政府戦線のメンバーは、目まぐるしい事態の急変に戸惑つてゐる。デビッドとロアンは、エイジの援護をしようとするが、狙点が定まらない。

「くそっ、速すぎる！」

V-MAXで戦闘機動を続ける機体を、通常のSPTが捕捉することは不可能だ。デビッドとロアンは、為す術もなく見守るしかなかつた。

紅い流星の体当たりが、蒼い流星の軌道をねじ曲げる。吹き飛ばされながらも体勢を整え、レーザードライフルを発射するMK-II。だが、大出力レーザーも、レッドパワーで強化されたマグネットィック・フィールドを貫くことはできず、虚しく拡散する。

ザカールは腕部に装備されたホーンオンアームで襲いかかり、MK-IIが可変による高機動でそれをかわす。

「エイジ、私は新たなるグラドスの指導者となる。それこそが、私に課せられた崇高なる使命なのだ！」

「支配が使命など……思い上がるな！」

「所詮、人間は何者かに導かれてこそ、安定する生物なのだ。ならば、より良き指導こそが、人が望むべき最高の至福！」

「神聖マザーコンピューターや旧支配者階級が繰り返してきた愚行を、またも繰り返すつもりか！ 彼らを倒したお前が！」

「勘違いするなよ、エイジ！ 私が憎むのは亡靈の支配と、それを装った者たちだ！ かつては旧支配者階級が力を持っていたのだから、彼らの指導はむしろ当然だ！」

「なんだと……！」

「だが、これからは違う。旧支配者階級以上の力をもって、私がすべてを支配するのだ！」

「そして、また地球人を苦しめるのか！」

「ふ……もはや、グラドス人も地球人も関係ない！ 人間には優れた者とそれに従う者の二種類がいる。私はすべての種族の優れた者たちを統合して、他のすべてを支配する。それが私の支配の原理だ！」

ル・カインの執念が乗り移ったようなザカールの拳が、MK-IIに直撃した。それに怯むことなく、MK-IIもナックルショットで応戦する。もはや技も駆け引きもなく、蒼き流星と紅い流星が激突を繰り返した。だが、ついに果てしなく続くかと思えた攻防に、決着の時が来た。MK-IIのV-MAXIMUMが稼働限界を迎えたのだ。

「どうした、エイジ！ 私のごとき『悪』を倒せずに、貴様の理想がかなうのか！」

「まだだ、このまま終わつてたまるかっ！」

だが、強制冷却が始まつたMK-IIはエイジの気迫に応えることができない。にも関わらず、レッドパワーV-MAXが持続するザカールが、ゆっくりとMK-IIの前に降りてくる。

「エイジ、これで終わりだ……！」

その光景を見ながら、ロアンの脳裏では激しい葛藤が渦巻いていた。エイジを救うべきか、それとも……。

ドールの銃口をザカールに向け、トリガーに指をかける。だが、指先に力を込めるよりも、ロアンの脳裏に疑問が浮かんだ。（――何故ル・カイン閣下のザカールはまだ動けるんだ？ レッドパワーは通常のV-MAXよりも持続時間が短くなるはずなのに……）

もはや蒼き輝きを失つたMK-IIに、紅き流星が突つ込んでいく。デビッドのドールが間に割り込もうとするが、間に合うタイミングではない。その時、直感的にロアンは気づいた。（そうか！ ザカールからリミッターが外されているんだ。だが、それでは機体が……！）

ロアンは通信機に向かって、叫んだ。

「閣下！ やめてください、閣下下！」

V-MAXに稼働限界時間が設定されているのは、機体に強烈な負荷を強いるためである。だが、ル・カインはザカールからその限界を設定するリミッターを外してしまっていた。必然として、『その時』は訪れる。

追い詰められたエイジが観た光景は、自分に向かって迫り来る紅き流星。それが内部からあふれるエネルギーの奔流に包まれ、巨大な光球となつていく姿であった。

「ル・カイン！」

ザカールは爆炎の中にその姿を消していく。エイジはコクピットのル・カインの表情を見た——満足げな笑み。少なくとも、なすべきことを残していく男の顔ではなかつた。

「閣下ああっ！」

ロアンは我知らず、涙を流していた。ついに、自分はル・カインに伝えることができなかつた。その信頼を裏切ることになつた、地球での自分の行動を詫びるつもりはない。だが、それでも——（それでも僕は、貴方を敬愛し続けていたのです……）

やがて、ロアンは涙の向こうに、ル・カインの姿を見た。拳で涙滴を拭い去つたロアンは、それが幻覚でないことを知る。無垢な表情を浮かべたル・カインの姿が、宙に浮かんでいる。そして、その身体が慈愛の笑みを浮かべる女性に抱きかかえられた……。

「姉さん！」

エイジが叫ぶ。そう、それはクスコの聖女と呼ばれたジュリアの姿であつた。

（エイジ……また、会えましたね……）

「姉さん、いったいその姿は！」

半透明に見えるジュリアの姿は、実物の数倍の大きさで宙に浮いていた。

（何も心配することはありません。私は刻印とともにあります……）

「刻印と？」

（そう……刻印の発動は不完全に終わりました。ですが、地球とグラドスの間の空間すべてに、私の意識があまねく満たされたのです……）

「それは……どういう意味なんだ、姉さん！」

(私の肉体は失われましたが、私の愛は二つの星と、その間に広がる広大な宇宙に常に存在し続けるのです。ル・カインさまも、これからは私のもので安らいでいただけます……)

エイジは、もはや言葉もなく、ジュリアの意識に耳を傾けていた。

(エイジ、貴方が恋をして、子孫を残し、そして精一杯生きて年老いて疲れたら、私のところへいらっしゃい。それまで、しばしお別れます……)

エイジは大きく頷いた。やがて、ジュリアの姿は空間に溶けるように、消え失せていった。静かな感動が、その場に居合わせた者たちの胸に満たされていく……。

そして、その余韻を全身に感じながら、エイジはデビッドとロアンに語りかける。

「さあ、帰ろう……。みんなと合流して、地球へ！」

——この後、グラドスとその支配圏は激しい内戦状態に陥った。すでに統率力を失った本星から、次々と植民惑星が離反していくのである。

だが、数十年の混乱期を経て、戦乱は穏やかに終息していく。ある人物をリーダーとする平和主義グループが、地道な和平工作を実らせたのだ。

人類が生存するすべての惑星は、共同体を構成し、一つの国家となつた。違う星に生まれた者たちの間でも愛情が育まれ、混血が珍しくない存在となっていく。

平和主義グループのリーダーは、惑星国家共同体の初代元首に任命され、慈愛に満ちた主義を、生涯仲間たちとともに唱え続けたという。

彼こそは、後に珍しくなる惑星間混血児の最初の世代であった。

アルバトロ・ナル・エイジ・ステファニー・アスカ——それが、永く語り継がれていく、その人物の名であつた……。

本作「蒼き流星の行方」はテレビシリーズ「蒼き流星S.P.T.レイズナー」の世界観に基づいた小説です。ここでは、この特典本を手に取られた皆さんに、この小説が書かれた経緯をご説明させていただこうと思います。

「蒼き流星S.P.T.レイズナー」は、'85年10月から'86年6月まで、全38話が放映されました。このテレビシリーズは皆さんもご存知の通り、様々な事情から放映話数が当初の予定よりも短縮されています。その結果、最終話である第38話は、第37話の直接的な続きとはならず、時系列を飛ばして物語の結末を描く形となりました。

そのテレビシリーズで描かれなかつた時間の物語は、描写を増やした最終エピソードとともに、'86年10月に「蒼き流星S.P.T.レイズナー A.C.T.・III 刻印2000」というOVAで描かれました。

「刻印2000」で「レイズナー」は完結したものの、それでもいくつかのエピソードが描かれずに終わつたことが、当時の高橋良輔監督のインタビューなどでは語られています。一つアンドラッドの僕は、そのエピソードの詳細を知りたくて、たまらなく思つたものです。

その後、脚本家となつた僕は、高橋監督から声をかけられ、とあるテレビシリーズの脚本を書かせていただくことになりました。打ち合わせの前後に雑談させていただく機会も多く、何度も「レイズナー」の幻のエピソードについて質問したものでした。それは'95年頃のことと、「レイズナー」の放映から十年を経ていました。監督の中でもすでにおぼろげな記憶となつていていましたが、いくつかの興味深いお話をうかがうことができました。どこかに発表するあてもなく、当時の僕はそのお話をの内容をメモ書きとして残しています。

その後、「レイズナー」テレビシリーズがLD-BOXとして発売されることになりました。当初は全38話を二つのBOXに分けて発売するだけの予定であり、OVAのLD化の予定はありませんでした。この時、パッケージのご担当の方から全巻購入特典を相談された僕が思いついたのが、幻のエピソードを小説化した小冊子です。「刻印2000」が再発売される予定がなかつたため、OVAの内容も含みつつ、幻のエピソードを再現する。それが実現すれば、LD-BOXを購入された方々にも喜んでもらえるだろうと思いました（後にOVAのLD化が決定し、描写が重なる部分は蛇足のようにもなつてしましましたが……）。

その特典案が実現することになつた後、まず決めるべきは誰が執筆するか——です。僕の希望は、やはり高橋監督に執筆していただきことであり、それがかなわざとも本編スタッフのどなたかにお願いしたいと思つていました。

しかし、高橋監督がご多忙であり、その他のスタッフの方々にも書いていただけた目次は立たず、企画は頓挫しそうになりました（余談ですが、この時の高橋監督はプロデューサーとして「勇者王ガオガイガー」を準備中であり、僕も脚本家として監督に声をかけていただけです）。

そんな時、高橋監督からさらっと「君が書けばいいんじゃない？」と言つていただいたのです。本編スタッフでもない者が、幻のエピソードを形にしてることに恐れ多く思う気持ちはありませんでした。しかし、それ以上に多くの「レイズナー」ファンの中で自分だけが聞いてしまったお話を、世に出したい——という気持ちが強かつたのです。

こうして、「蒼き流星の行方」を執筆しました。今回のBD・BOXに特典として収録されたバージョンは、稚拙な原稿を多少なりともお化粧直したいという、僕のワガママで改稿させていただいたものです。

長々と書いてしまいましたが、読者の皆さんにお願いがあります。本作は高橋監督にうかがつた話をもとに書いたとはいえ、これが「レイズナー」の真の結末——とは考えないでください。「蒼き流星 S.P.T レイズナー」という作品は、「刻印 2000」で感動的なエピローグを迎えてますし、それこそが真の結末だと思います。

幻のエピソードもし映像化されていたら、素晴らしいスタッフ皆さんのが手で名作になっていたはずですが、ここに存在するには僕の拙文にすぎません。

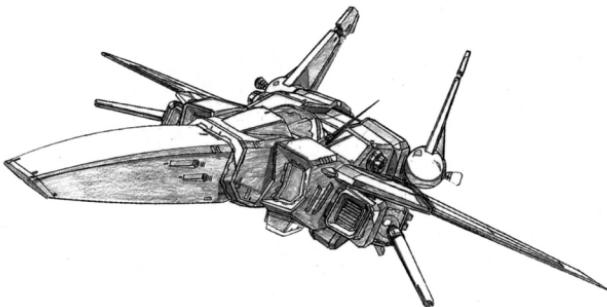
けれど、この「蒼き流星の行方」を骨格として、読者の皆さん想像力で豊かな肉付けをしていただき、「あり得たもうひとつ可能性」を中心の名作として完成させていただければ、とても嬉しく思います。

（余談）

'95年10月3日、皆さんはどこで何をしていましたか？

そう、エイジが火星にやつてきて、アンナたちと出会ったその日です。僕は都内某所で、とある対談の司会をしていました。LD・BOXの解説書に収録する、高橋良輔監督とエイジ役の井上和彦さんの対談です。『その日』が今日であることを告げると、お二人ともとても感慨深そうなご様子でした。

僕はもしかしたら、世界一幸せな「レイズナー」ファンだったのかもしれません。



蒼き流星SPTレイズナー
THE CONCLUSIVE STORY
蒼き流星の行方

2013年9月18日発行

発行:(株)バップ

監修:高橋良輔

著:竹田裕一郎

ブックデザイン:渡辺高志(GALOP)

表紙・裏表紙

イラスト原画:田村勝之

仕上げ:旭プロダクション

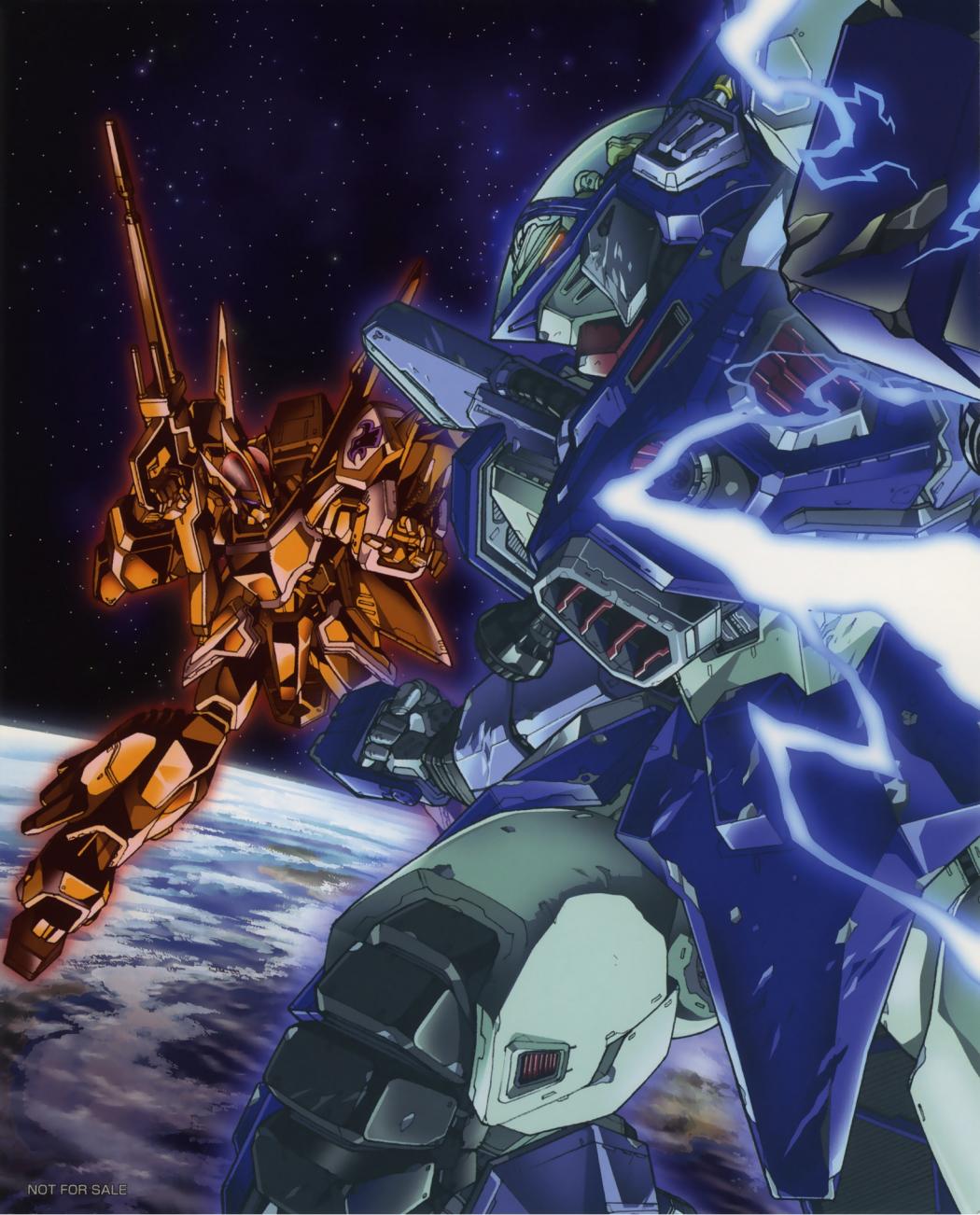
特効:八木寛文

背景:猿プロダクション

禁無断転載

©SUNRISE

VPXY-71989



NOT FOR SALE